

## 第七章 埼玉国体

平成十六年度の三年生 岩永姉（深江）岩永妹（深江）金床（熊本）

### 一 移籍

平成十五年一〇月 地区新人戦 二位 スタメン 岩永姉 岩永妹 高岡 杉野 ジャトウ

#### 【案内文書】

岩永姉妹は股関節が非常に硬いので、オフエンスもディフェンスも身体の切り返しに難があります。一年生の時は中学時代の財産で相手を翻弄する場面がたくさんありましたが、二年生になって周りが上達してくるとプレイのキレの良さが目立たなくなってきたので、なぜだろうと思ってよく観察していたらそのことに気がきました。

金床は一時成長の気配を見せましたがケガのためにプレーキがかかったりして継続して訓練することができません。ですからいつも付け焼き刃です。

杉野のシュートは天下一品です。しかしそれを活かしたいのならばディフェンスもしっかりやらなければなりませんし、パスやドライブも人並みにできるようにならなければなりません。まだその認識が足りないようです。

森重の身体能力は一級品です。しかし、体調不良でしばしば練習に穴を空けますから金床と同じでしっかりと訓練することができません。思いは強いのですがイメージと現実のギャップがまだ分からないようです。

ジャトウは本当によくまりました。四月の時点ではとても憂鬱でした。どうやってこの選手を試合で使えるようにするか見通しが立たなかったからです。しかし、今はあの頃のジャトウとは別人のようによくなりました。ウィンターカップ予選でぶつつけ本番ながらチームの軸となる活躍ができましたし、何より私から叱られても落ち込まなくなりました。でも、彼女は全国のトップレベル相手にどれだけやれるかが基準であり、今度の新人戦でどれくらい働けるかが基準ではありませんから、そういう観点で見ればまだまだ課題はたくさんあります。

その課題とは、ジャトウはまだまだ夢見る少女の域を出てはいないということです。わかったということはやれるということだと思っています。私の指導に対して「ハイ」と返事したことはコーチの教えを忠実に守ったことだと思っています。「やれる」ということは、無意識にその動作が出てくるようになるまで何度も反復練習しなければならぬということはまだわかっていません。

高岡は夏休みから九月始めにかけて優柔不断な時期がありました。ウィンターカップ予選からモヤモヤが晴れたようで思い切りがよくなり、しっかりしたプレーができるようになりました。

というわけで、高岡以外はまだまだ自分をもちと理解し、自分に取り込まなければならぬことがたくさんありますが、やはり私はこのチームも来年全国のトップレベルに迫れるチームにしたいと思っています。これから三週間、新チームの選手たちにとって大切なことは、夏休みからウィンターカップ予選までの自分をよく分析して自分の弱点をしっかりと認識し、自分の長所を活かしてどのような仕事ができるかを明確にイメージして毎日を過ごすことだと思います。

#### 【結果報告】

九月下旬に行われたウィンターカップ予選の案内文書で下級生のことについて書きました。下級生にとつてはもつとも力を付けなければならぬ八月から九月にかけてケガ人が続出、結局この夏は主力選手の強化のみでバックアップ選手の強化はできなかったという内容でした。

私は九月下旬に下級生に聞きました。「国体の取材やウィンターカップの取材でにぎやかだけど、お前達が一番気になっていることは何だ？」すると口をもごもごさせている選手が大半で、何か言ったかと思えば

「私はディフェンスがもっと強くならないと思います」というようなピンぼけ回答ばかりです。答えは「一〇月十八・十九の長崎地区新人戦」。国体は、立川・谷川・林田・二宮・清水・成井の三年生たちが主戦力で戦うので下級生には関係なし。下級生にとって気になるのは自分たちが主役で初めて戦う地区新人戦以外考えられないでしょう。それがスパッと出てこない新チームの幼稚さにはがっかりしました。

ケガ人が復帰して全員が揃った九月下旬からは、国体用と地区新人戦用の二本立てで練習をやり始めました。それまではインターハイと国体とウィンターカップを睨んだチーム創りで、私の口から出ることはもすべてそこに焦点を絞ったものばかりでした。それが九月下旬になると突然矛先が変わり、一年生や二年生が標的にされ始めたのです。下級生は面食らったと思います。

一〇月十一日から十三日の三連休に国体チームの遠征を計画していましたが、長崎商業の鮎川が腰を痛めたのと純心の二人はその一週間後が長崎地区新人戦なので自チームの練習を優先させて不参加だったので、結局鶴鳴単独の遠征になってしまいました。そこで下級生も連れていくことになり、下級生だけでの練習試合も数回組み込みました。この時私は「新チームはジャトウ以外は小さい選手ばかりだがモノになる」と思いました。ちょっととした動きや反応の中に「鍛えれば伸びる」という要素がちりばめられているのです。

そういう経過を辿って迎えた地区新人戦。まだ訓練不足の部分が見える場面がありましたが連休の時の遠征で感じたことは間違いなかったというブレイがあちこちに登場しました。

ジャトウは足底筋膜炎のために九月十七日からずっと、試合だけはぶつつけ本番で出ますが練習は自主練習だけです。チーム練習にはもう一ヶ月参加していません。ですから新チームは試合の大部分をジャトウ抜きの超小粒選手だけでやらなければなりません。だから終始オールコートプレスです。今日の試合は出岐と中川の全日本ジュニアペアに副島の活躍が加わり負けてしまいました。しかし、負けても屈辱感や怒りはまったくありません。むしろ「このチームはモノになる」という実感を得ることができました。負けただけでも久々に爽快な気分を味わっています。

#### 【戦評】

鶴鳴は四〇分間フルコートマンツーマン。純心は四〇分間ハーフコートマンツーマン。前半は鶴鳴の動きの良さと思ひ切りの良さが目立った。終始純心は後手に回る。しかし後半、出岐が爆発。続いて副島がスリーポイントを立て続けに決め、中川も遅れてはならじと果敢に攻撃。全日本ジュニアが暴れ出し、周囲の選手もそれに呼応して動きがよくなったので純心の逆転は時間の問題かと思われた。が、鶴鳴も粘った。

双方シュートを落とさない。最後はやっぱ純心が逆転。九五対九七というのは女子の試合にしては珍しく、数字だけから試合の展開を想像すれば双方ノーディフェンスのランアンドガンバスケットかなと思われそうだがそうではない。両チームともしっかりしたディフェンスでルーズボールの争いなど火花が散りそうな場面がしばしばあった。久々に内容の充実した試合を見せて貰った。このまま両チームとも成長を続け、来年は長崎からインターハイ・国体・ウィンターカップのチャンピオンが出ることを期待したい。拍手！。

文責 山崎 純男

平成十五年十一月 県新人戦 優勝 スタメン 岩永姉 岩永妹 高岡 杉野 ジャトウ

#### 【案内文書】

国体一週間前の地区新人戦では九七対九五で純心に負けました。その案内文書の中で私は、新チームの先週たちに苦言を呈しました。間近に控えた地区新人戦に対する思いが軽すぎたからです。

そして、試合が終われば今度は「結果的に負けたものの新チームはジャトウ以外は小さい選手ばかりだがこれはモノになると思った」とか「ちょっととした動きや反応の中に鍛えれば伸びる」という要素がちりばめられているのです」という表現で新チームを誉めました。

その後すぐ国体に出かけましたし、また、あれから二週間しか経っていないので「思いの軽さ」は依然としてそのままだろうし、「鍛えれば伸びる」という要素もそのままだろうと思います。ただ、あれからわずか二

週間しか経っていないけれども「思いの軽さ」はいくらか少なくなっていて欲しいと思います。なぜなら、先の地区新人戦では来年もいけそうだという感触を、彼女たち自身が得たはずですから。

もしこの大会で、選手の思いが地区新人戦とは違うことを私が見出せたら、このチームは風軍団に近付くことができるのではないかと思います。しかし、本人たちは結構がんばっているつもりでも、幼稚さを退治するというのは大変な作業ですから、もしこの大会で依然として彼女たちに幼稚さが残っているも、がっかりしないで辛抱強く見守ってほしいと思います。

#### 【結果報告】

十一月五日（木）。体育の授業のマット運動で倒立前転の練習をしていた高岡は、腕を曲げるタイミングを間違えてグニャッと二つ折りになり、首を捻挫してしまいました。その日は様子を見て翌日専門医に診て貰いました。マヒやしびれなどの深刻な症状はありませんから次第に治っていくとは思いますが、受傷後試合当日までの十一日間は安静と自転車漕ぎなどの軽いメニューだけで、チーム練習は一切させていません。初日のウォームアップ後「痛みは感じなかったので試合に出してください」と申し出てきたので用心しながら出場させました。

一日目は大事をとって少ししか出しましたが、二日目は大丈夫みたいだったので出場時間を増やしました。三日目の決勝戦はスタメンで三六分間も出場させました。しかし、大会直前十一日間のブランクは簡単には埋まりません。ドリブルを三回スティールされ、「ヨシー」というジャンプシュートをジャンプが少しぶれて落とすなど、本来の動きが出ませんでした。

でも、ブランクのありなしやプレイの出来不出来にかかわらず、私は高岡のプレイに指呼しも苛立ちは感じません。彼女は新チームの選手たちのマラソンレースに例えれば5kmを過ぎたあたりで戦闘集団から一歩抜け出してリードしたところだと思っています。

では、他の選手は伸びていないのかというところではありません。地区新人戦ではこどもっぽい顔をして夢中で動き回っていただけだったのに、今回はみんなキリッとした顔で試合をしていました。個人的には高岡より遙かに優れたシュート力（杉野）や速さ（森重）やパスのセンス（金床）を持っている選手がいますが、それらの選手は高岡に比べると一試合通して安定した力が発揮できないとか、ディフェンスが居阿前のままでは強いチームには通用しないなどの改良点をちょっとだけ残しているだけで、高岡に遠く及ばないというわけではありません。

特にジャトウはほんとに成長しました。得点と出場時間（三五分 五〇点 二反則）を見ればおわかりのように、チーム得点の半分をたたき出しています。インターハイの頃迄は疲れてくるとミスを連発するし、「ヤッター！」と思うプレイを失敗すると落ち込むし、とにかく気を配りながら使っていました。

でも国体後「殺すぞ！このヤロウ！」と、まるでサラ金業者の取り立てなみの脅しことを浴びせながらたたき上げました。自分でも今の自分は嫌いです。でも私だって必死です。ジャトウをホンモノにするためだったらなんでもやります。

脅しといえば私は、練習では叱っても試合では叱らないようにしていますが、今回の試合ではまたしてもジャトウ以外の選手にも罵声を浴びせ続けました。公的な場で選手に恥じをかかせるのは嫌いなのですが、国体の敗戦の悔しさがまだ癒えないのと、新チームの選手たちの自主性の足りなさになんかならなくなり、醜いベンチコーチをしてしまいました。観ていた人達に不快な思いをさせたことをお詫びいたします。

#### 【戦評】

純心はジャトウと杉野の得点を阻止すべく、ジャトウにはダブルチーム、杉野には密着マーク作戦を採った。鶴鳴はこれといった的を絞ったディフェンスではなく、普通のマンツーマンディフェンスでスタートした。純心のディフェンスは杉野にだけは功を奏した。杉野は密着マークを嫌がって消極的になり、わずか六点しか取れなかった。しかし純心のジャトウ潰し作戦はことごとくファウルにつながってカウントワンショットやフリースローを許してしまい、時間を経ることに苦しくなる試合展開となった。

終わってみればジャトウ五〇得点。純心のジャトウ潰し作戦は矢尽き刀折れという結果に終わったが、これは純心の作戦失敗ではなくジャトウの成長を誉めるべきであろう。総合的に見れば地区新人戦では双方歯切れのいオフェンスを展開していたが、今回は純心の淡泊オフェンスと鶴鳴の棒立ちオフェンスが目立ち、「これではどちらも全国大会で会場を沸かせる試合はできないな」という印象を与えた。奮起を期待する。

文責 山崎 純男

#### 【中川転校】

県新人戦後、純心の中川は桜花学園に転校した。彼女は純心中学校出身だ。中川が転校して約一ヶ月後、ウィンターカップの会場である東京体育館で私は中川を見かけた。転校後六ヶ月を経ていないので当然彼女は桜花学園のベンチには入れず、観覧席で応援していた。私も中川も互いにそれぞれの存在には早い段階で気付いていたし気にしていた。お互い気にはしていたが目が会うタイミングがなかった。

私は東京体育館にいる間に必ず中川には声をかけるつもりでいた。中川は中川で私に挨拶するタイミングを常に捜していたらしい。私が中川にかけることばのフレーズは決まっていた。「よ！元気にしてるか？がんばれよ」である。それは、この移籍に関して批判的な風評が私の耳にも入ってきていたから、中川にもそれが耳に入っているだろうと思いい、それを払拭してやりたかったからである。そのタイミングは最終日の表彰式の前に訪れた。私は用意していたフレーズ通りのことばをかけた。

中川の場合、これは私の推測ではないが、彼女はおそらく中学を卒業したらず桜花学園に行きたかったのではない。しかし、卒業した年には長崎インターハイが開催される。それを知りながらお世話になった純心を蹴って他県の高校に進学し、他県の選手として長崎インターハイに出場する。それが果たして最善の進路選択なのか。彼女は相当悩んだのではない。その結果出した結論が、長崎インターハイが終わるまでは純心に恩返しをしよう。その後桜花学園に転校する。その結果半年間は公式試合に出られなくても二年生と三年生の二年間は日本一のチームでプレイできる。

選手の進路のことについては第一章の冒頭で述べているように、引き受けるにしても送り出すにしてもその選手にとって一番幸せなのは何かを最優先に考えなければならないというのが私の持論である。それは、選手の希望を最優先にしてやれということではなく、その選手が現実性のない夢を追いかけている場合は目を醒まさせるアドバイスはしてやらなければならない場合があるのも含めてである。

選手の進路選択に関しては、義理、人情、友情、恩、エゴなどなど、いろんなものが本人の周りで飛び交うので、私が理想論を述べること事態現実性がないと言われれば二の句が継げないし、事実私自身裏切られたり嵌められたりしたこともあるが、基本的に「進路選択は選手の幸せ最優先」という考えは生涯貫き通そうと思っています。

平成十六年〇一月 九州春季二次予選優勝 スタメン 岩永姉 岩永妹 高岡 杉野 ジャトウ

#### 【案内文書】

ウィンターカップ終了後、十二月二十九日の朝長崎に帰り着きました。息つく暇もなく一月二日午後から新年の練習が開始されました。長崎ゆめ総体では第三位にかじりついてどうにか面目を保った鶴鳴でしたがこの第三位は本当にやっとかじりついた第三位でした。しかし、ウィンターカップの第三位は平成三年のインターハイ優勝や平成八年のインターハイ準優勝に匹敵する第三位でした。

この新人戦にエントリーされた下級生たちは、ちょっと頼りない三年生が最後は東京体育館の大観衆とテレビ観戦の全国バスケットファンの心を揺さぶる試合ができるまでに成長した過程をつぶさに見ています。きつと、その魂を受け継いだ試合をしてくれることと思います。

個々の選手について…

ウィンターカップに間に合わせようと思つて無理矢理割り込み手術をしてもらった岩永みゆきは結局間に合いませんでした。ですから今大会も無理をさせずに温存しようと思つています。妹のかほりに二人分がなばつ

てもらいます。

金床は「化けるかもしれません」と前回言いましたが、それを確かめようと思ってウィンターカップでもできるだけ多く出場させました。私の感想は「イケル」なのですが、本人の意識がどの程度なのかはまだつかめません。千載一遇のチャンスをつかもうとしてなりふりかまわずがんばれるのか、何かアクシデントが起こればそれで挫折してしまう程度のものなのか、これから明らかになっていくでしょう。

高岡は太鼓判です。桜花学園戦ではさすがに出ず機会がありませんでしたがそれ以外は全試合出場。全国トップレベルのチーム相手に少しもひるまず挑戦していました。そのチャレンジ精神は見事でした。

杉野のシュート力が活きるほどウィンターカップの舞台は甘くありませんでした。ウィンターカップに出場するチームの上級生はインターハイの時に比べたらみんなしつかりしたおとなになっています。杉野のプレイは修羅場をいくぐってきた相手チームの上級生にはことごとく見透かされ、思うようにやらせてもらえませんでした。でも、出場したほんのわずかの時間になんとかシュートを打とうとしていた気持ちはこれから生きてくるでしょう。

気持ちばかりが空転していた森重はようやく落ち着いて世間を見渡せるようになりました。長い人生には急いでもどうにもならないことがあります。成功だけが立派な財産ではありません。失敗や挫折も貴重な財産なのです。そんなことを受け入れられるようになれば、もともとスピードは群を抜いている選手ですから後から追いつくのは造作もないこと。ウィンターカップ期間中の彼女の態度を観察していたら、それもそう遠くはないような気がしました。

#### 【結果報告】

春には団子状態でスタートした新入生のレースが、夏秋冬と季節が変わる毎に縦長になってきます。誉めたりけなしたりして不安定だった私の選手評も、この大会でおおむね見極めがついてきます。その見極めをより確かなものにするために選手たちの一挙手一投足に目を配ります。

その見極めをもとに来年再来年の個々の起用方法や行く末を描いては消し、描いては消しします。描く映像はもちろんそれぞれの選手のプレイが主体ですが、その時の表情やほんのちよつとした瞬間に現れる性格的な特徴も組み込みながら何度もシミュレーションします。

二年生は昨年見極め済みですから一年生のシミュレーションにかぶって登場します。そのシミュレーションの中にこれまで登場しなかった金床は時にはデジタル映像ではつきりと、時には焦点が合わずボンヤリとになりますし、一年遅れではありますがとにかく登場するようになりました。それに加えてこの正月合宿に参加した中学生たちの顔がちらほら登場します。

見極めをするにあたって片時も目を離せないのがジャトウです。ジャトウが成長したというのはこれまで再三述べてきましたが、それはひどいシュート、ひどいスタミナ、ひどい集中力が少し改善され、全国レベルの試合でも通用するようになったということであって、ジャトウの奥深いところに潜んでいる人間的な弱点を改善するまでには至っていません。

だからどうやって改善しようか、どういふことばを使おうかといつも神経を使います。選手をバスケット以外でも通用する人間に育てあげるといふのはジャトウに限らず誰が対象であっても難しいです。しかしそれが指導者に嫁せられた課題なので投げ出すことはできません。そのためには鬼になります。

来月の九州大会直後から約三週間、ジャトウ、ラマ(熊本慶誠)、ママドウ(延岡学園)を三人一緒にセネガルに帰省させます。ジャトウのママへのおみやげにウィンターカップの銅メダル。ジャトウのコーチへのおみやげにウィンターカップの監督賞のトロフィーを持たせます。しかし、故郷の家族が何より喜ぶのは「ウワー、ジャトウは一年前に比べたら人間的に成長したねえ」という感想だろうと思います。そういうわけで、近頃はバスケットの話だけでなく人生とか人間についてジャトウに話す機会が多くなり、電子辞書を聞く回数が増えました。

そして、ジャトウの人間性を読めるようになった私は、チェックの入れ方をウィンターカップ後変えまし

た。ウィンターカップ前はジャトウが私の指導に反することをした時は「またかおまえ！何度言えばわかるんだ！」と怒鳴りつけていましたが、最近はナイスが出るまで待ちます。ナイスが出た途端にプレイを止めて「今のすごいプレイをやったヤツと、さっきバカなことをやったヤツはジャトウという名前の同じ人物だよな」と切り出します。

#### 【契約違反】

県新人戦（十一月十五、十七）の前、私はみんなの前でジャトウを説教した。選手に説教をする場合、その内容はしつげをすとかしつかりした人生観を持たせるといことが主体となる。が、ジャトウの場合は「契約違反」といことばを使った。さらに「お前にはゼニがかかっているんだぞ！」毒づいた。日本人の選手には口が裂けてもこんなセリフは使わない。

ゼニがかかっているというのは、ジャトウは日本人の特待生と同じ扱いだ。ジャトウの場合は朝夕の食事代と昼食代は学校から支給される。国内の特待生は、入学金・授業料・入寮費が免除だが寮での朝夕二食の食事代月額二万六千円は自己負担であり、昼食は高校の食堂で取るがこれも自己負担である。それ以外に日常生活必需品購入のために月額二万円（理事長のポケットマネー）が支給されるし、バスケット用品は一切部で賄い、年一回の帰省旅費も部で賄うという意味である。

みんなの前で敢えて言ったのは、ジャトウがどのような待遇で在学しているのかをみんなに知って貰うためである。そういうことをキチツと言っておかないと「契約金を沢山貰ったらしい」とか「毎月一〇万円お小遣い貰っているらしい」など、憶測に尾ひれが付いて広がる恐れがあるからだ。

契約違反といことばについてはちゃんとその意味を説明した。

「ジャトウをリクルートした理由は、一八五cmもある長身選手を日本で探せば走るのも動きも遅い選手しか見つからない。お前のように走れて跳べて一八五cmもある選手が獲得できれば、一年時のインターハイ・国体・ウィンターカップ、二年時のインターハイ・国体・ウィンターカップ、三年時のインターハイ・ウィンターカップの計八回は全国トップレベルを狙えると俺たちは思った。しかるに、その八回の内すでにぶたつをお前のファウルトラブルでダメにしている。お前は、試合終了までコートでプレイしてこそ存在意義があるのであって、五反則退場で早々とベンチに下がるのならはお前をわざわざセネガルから連れてきた意味はないのだ。日本の選手と違ってお前は、鶴鳴に留学したのではなく、在学中の八回の全国大会で自分の存在が好結果をもたらすために鶴鳴と契約したと思え」

さらに私は続けた。

「これが実業団やプロなら戦力外通告か次年度の契約はしないということになる。だが鶴鳴ではバスケットさえしていれば勉強なんかしなくていいのではなく、ちゃんとした教育を受けさせてやらなければならぬ。だから教育とかしつげという行為を無視して契約といことばは使わない。したがって使い物にならないからといってお前をクビにすとか、特待生扱いを取り消すといことばはしない。だけど、自分の立場が他の選手とは違うといことばはわかっておけ」

その後、ウィンターカップではそこそこの仕事をして初年度の全国大会すべてをダメにすることはなかったが、ジャトウの本質を根本から変えることはできないという一年であった。それは一言で言えばイスラムの壁である。

一例を示そう。理事長から貰う生活費をジャトウは毎月半分セネガルの実家に郵便で送りたいと私に申し出た。現金を郵便で送るなんて危ない危ない。私は口座に送るのが一番いいから実家の預金口座を知らせろと言った。ジャトウの返事は「口座なんか持っていません」だった。いろいろ思案したがうまい方法がないので帰省の時に渡せといことばで決着したが、この一件で私は「セネガル人留学生は親も子も留学というより出稼ぎと考えているんだ」といことばが分かった。ちなみに、日本円の一万円はセネガルの家族が一ヶ月は暮らせるお金らしい。出稼ぎ感覚で来ている選手に対して鶴鳴に貢献するしないの話など通じるわけがな

い。もう一度考え直さなければならぬと思った。

【ジャトウ正月 山崎純男のブログより】

十二月三〇日（日）

みんな帰省しました。寮に残っているのはジャトウだけ。十二時十七分の高速バスりんどう号でラマ（熊本慶誠高校）が到着。三〇日・三一日・元旦の三日間は長崎で過ごさせます。三一日と元旦は太田さん（鶴鳴が三冠王を取ったときのキャプテン）宅にホームステイです。

一月十二日（月）

このところずっと、二月十七日から帰省するジャトウの準備でいろいろ大変です。航空券の手配はもちろん、再入国ビザの申請やら何やらありますが、何より大変なのがショッピング。ミスターMAXへ連れて行ったらラマと二人で電化製品（DVD）などをしこたま買い込むんです。母国の人たちへのおみやげなんだそうです。彼女たちは勝手にそんなものを買ったのですが、私はそれがセネガルで使えるかどうか心配。日本の電気製品はアメリカではそのまま使えますが中国のコンセントは二百ボルトなので変圧器を使わなければなりません。ヨーロッパやアフリカはもっと複雑で、電圧だけでなく映像電波の仕組みが日本とはずいぶん違うのです。

また、ジャトウたちが買った電気製品は量が多くて飛行機の携行荷物としては持って行けません。したがって別輸送となります。何が一番安いか調べなければなりません。調べた結果船便が一番安い方法だとわかりました。すると今度は船便の正確な輸送料、期間、一個の重量やサイズの上制限定などいろいろなことを調べてやらなければなりません。昨年末からそんなことばかりに振り回されています。今週内には発送します。

一月十九日（月）

結局船便は危ないので、電気製品はパッケージをばらして本体だけにし、バッグの中に詰め込んで携行荷物として持つて行くことにしました。いやいやほんとに大変です。

二月五日（木）

NTSC・PAL（映像電波）両方対応のDVDをインターネットで見つけて注文しました。最近のPAL対応はSECAMにも対応するそうなので、購入してジャトウにプレゼントしてそれがセネガルでOKだとわかったら他のセネガル留学生は来年購入するということで行こうと思います。

平成十六年〇二月 九州春季選手権二回戦 スタメン 岩永姉 岩永妹 高岡 杉野 ジャトウ

【案内文書】

冬休み以降、三年生と毎日スクリメージ（試合形式練習）をやっています。全国トップレベルのチームの「試合運び」「頑張り」「執念」「勇氣」「決断」などなど、二月二六日まで毎日手伝いに出てきてくれる三年生から吸収できるものは全て吸収させたいと思うからです。手も足も出ないスクリメージの時もありますし食らいつく時もあります。まだまだ不安定です。

そうやって新チーム全体のことを考えながら一方ではジャトウの一年間のまとめのことを考えています。それは私の総まとめではありません。ジャトウ自身に自分を振り返らせる総まとめです。彼女はこの九州大会で日本での最初のシーズンを終えます。セネガルでは経験しなかった春夏秋冬という季節を経験し、食生活の違いに悩み、言葉が通じない初期にはかなりのストレスを抱え、私たちには理解できなかったヘヤートリートメントのことで苦しみ、それらをなんとかクリヤーしながらここまでやってきました。

しかし一方では、逆上しやすい、気乗りする時と気乗りしない時の較差が大きすぎる、常に自分を正当化しようとするなどの性格上の問題も浮き彫りにされてきました。これらのことがどの程度改善されたか、どれくらい残っているかという決算書を、この九州大会が終わった時に彼女自身が作らなければなりません。

二九日の三校時に少しだけこのことについてアドバイスしました。

ジャトウ、お前は去年私からかなり叱られたね。他の日本人選手もそうだけど一年目は誰でも叱られる。しかし本当にいい選手は二年目は叱られる回数が少なくなり、三年目には私を感じさせられるくらいになる。でも、ダメな選手は三年生になっても叱られることがなくならない。人それぞれだ。ジャトウはどうなるのかな？

試合前のこの二週間、この一年を振り返って自己採点をしてごらん。どこが改善されて何が残ったままなのか。試合が終わった時、勝ち負けや失敗や成功の回数には関係なく、「私は自分を高めるために一生懸命努力したぞ」という充実感が残れば翌日セネガルに帰る時に晴れ晴れとした気持ちで帰れるだろう。

一年を振り返って日本人の勤勉さ（外国人から見れば融通性のなさ、頑固さかもしれない）とイスラム社会のインシャラー（後述で解説します）のギャップはとても大きいと感じています。慣れなければならぬということなのでしょうが、日本人の中でも特別に融通の利かない私にはとても難しい問題です。

#### 【結果報告】

ジャトウが来てくれたおかげでさまざまなことが勉強できた一年でした。

ジャトウが来たためにストレスがチーム内に蔓延した一年でした。

ジャトウはこのあと十七日成田発アリタリア航空で里帰りします。二日間間の休暇です。この間、残った日本人選手も里帰りしたジャトウも、互いに何をしてやり何をしてやらなかったか考えるでしょう。三月八日、再び会う時にそれらのことがお互いの新たな進歩の原動力に姿を変えて現れるのか、それともストレスがくすぶり続けているのか、私には読めませんが出てきた結果によって対処法を考えようと思います。

金床は試合の大事な場面でまかせられるようになりました。鶴崎戦の最後の大事な場面にほんの少しの間ミスを連発しましたが、それは昔の金床の弱さが露呈したものではありません。神様が「良くなったけどまだまだ安心してはダメだよ」とちょっとだけ戒めてくれたのだと思います。

高岡は「鶴鳴はこんな時はこうするんだ」という考えを一生懸命実行しようとする選手です。であるが故に時々空回りします。でもそれは、飛躍の前兆だと私は考えています。彼女の空回りや自滅は、鶴鳴のユニフォームを着るにふさわしい選手に少しでも早くなりたいために鶴の卵を食べ過ぎ、それが消化不良のために少し下痢気味なのだと思います。

森重は自分の内面に潜む弱点を客観的に見ようと努力するようになりました。まる一年それにかかりつきりでしたがそれは足踏みではありません。自分の弱点を認めるようになったのは成長だと思っています。

ジャトウは無様な試合をしたあと、観覧席から慶誠と戸畑商業の試合ではなく、ほとんどの時間隣りの延岡学園とれいめいの試合を観ていました。このような甘さを知りつつ来年は別の導き方をしなければならぬでしょう。

#### 【INSHAH ALLAH】

ジャトウといる話していく内に、イスラム世界ではインシャラー（INSHAH ALLAH）という考え方があることがわかった。イスラム教の絶対神アラーを讃える言葉らしい。

「神がそうお望みならば」

「神のお恵みがあれば」

「神の思し召しのままに」

という訳になるようである。

ジャトウが何かをした時に「なぜ？」とか「いつ？」と私が聞いてジャトウから「インシャラー」という答えが返ってきたことはない。だからインシャラーはどんな時に使うのかインターネットで調べた。

一例を示そう。



中東で働いている日本人があるものを注文したが配達予定日になっても品物が来ない。そこでなぜ配達予定日に来ないのか、いつ来るのかを尋ねたところ「インシャラー」ということばが返ってきたそうだ。この場合のインシャラーは前述の三つとはちよつと違って「さあ？」という意味に近いようである。日本では、発送元に尋ねたり配達業者に尋ねたりして確かめてくれるものだがそれもなし。

彼は注文したものの品物の到着日が分からなければその後の仕事の計画が立てられない。それでは困るのでかなり文句を言ったが出てくる言葉はインシャラー。このため、彼にとってインシャラーはいい加減で約束を違えたときのいいわけにしか聞こえなかったと言っている。

確かに鶴鳴に来た頃のジャトウは何をするにものんびりしていて時間を守らないし、ミスしたことを咎めるとすみませんの前に必ず言い訳をしていた。インシャラーについてジャトウと話していた時「友達と約束をしていてその時間に友達が来なかったりすっぽかされたりしたことはないのか？」と聞いたらジャトウは「ある」と言う。「そんな時怒らないのか？」と聞くと頭を横に振った。

いろんな会話の中でジャトウは「日本のJRはなぜ時間通りに出発して時間通りに到着するの？どうやってそんなことができるの？」と質問したことがある。私たちににとってはそれは当たり前的事だが彼女らにとっては信じられないのだ。「セネガルではどうなの？」と聞くと、まず列車が時間通りに出発したり時間通りに到着することはなく、日によってはとうとう来ないこともあると言う。

セネガルでは、時間に遅れたり約束を破ったりノルマを果たせなかったりするのとは日常茶飯事で、そのことで「すみません」はないのだ。私はジャトウとのやりとりの中で、インシャラーは自分が何か不都合なことをしてかしてしまった時に、神様が「君がそうしたかったらそうしてもいいよ」と言ったのでそうしました、という言い訳をするためのことばでしかないんじゃないかと思えなかった。インシャラーが神を讃えることばと受け止める寛容な心はまだ私にはない。

#### 【ジャトウ帰省 山崎純男のブログより】

二月十四日（土）

九州春季選手権大会の初日。二回戦で大分の鶴崎高校に負けました。ジャトウははやっぱりだめでした。試合の事などまるで上の空。気持ちはこの試合の直後に帰省するセネガルに飛んでいました。

二月十六日（月）

本日は博多泊まり。明日（十七日）朝早く福岡空港から成田に向かい、同日昼過ぎの便でジャトウたちをセネガルに帰します。私も少し遅れた便でアメリカへ逃亡します。一応二四日に帰る便を取ってはいます。がそのままアメリカに亡命するかもしれません。

二月二六日（木）

ジャトウ・ラマ・ママドウの帰国の世話は大変でした。成田で手続きをしようとしたら係員が「マルペン空港乗り継ぎの通過ビザがありませんね」というのです。それはイタリア大使館に電話で問い合わせ、「空港から出ないなら必要ありません」と回答を貰っていたんです。そのやりとりですつたもんだ。

次に荷物。各航空会社で重量と個数制限が多少異なります。JTBに問い合わせたらアリア航空はひとり二三kgが上限だと言われました。それではほんの少ししか運べないのでアリア航空に直接電話で問い合わせました。電話に出た女性から「預ける荷物は二三kgが上限ですが機内持ち込みと合わせて四五kgまでなら大丈夫です」という回答を貰いました。

ところが三人が持ってきた荷物は預けるものだけです。四六kg以上。しかも、預ける荷物の本当に正しい重量は二〇kgまで。それを越えると1kgにつき一万一九〇円の超過料金を取られます。単純計算だと三分で約七〇万円の超過料金になります。困り果てている私を見て係員が四一万円にまけてくれたのでカードで支払って送り出しました。参考までに、エアーフランス航空も荷物についてはほぼ同じで、アメリカのノースウエスト航空は一個の荷物が三二kg未満で二個まで預けられるそうです。

二月二十七日（金）

亡命失敗！受け入れ先がなく、やむなく二四日に帰国しました。

参加者 山崎純男・初田亜沙美・北平祐子・立川美礼・林田明佳・二宮可南子・成井可奈

訪問先 ミネソタ州のミネアポリス・セントポール。 Wisconsin シンソウのリバーフォールズ。

旅程 二月十七日（火）成田発十四時五五分 ノースウエスト航空〇五〇便

二月十八日（水）UWRF 対 UWSTAUT女子の試合見学

二月十九日（木）ミネソタ 対 サクラメントとNBAの試合見学

ウルブスチアガールと試合終了後コートで記念撮影

二月二十〇日（金）リバーフォールズ高校訪問交歓会

二月二一日（土）ミネソタ大学女子練習見学

ミネソタ大学対パデュー大学男子試合見学

リバーフォールズ大学対ブラットビル大学男子試合見学

二月二二日（日）ミネソタ大学対ノースウエスタン大学女子試合見学

リバーフォールズ大学日本人留学生との交換会

二月二三日（月）ミネアポリス発十三時〇五分 ノースウエスト航空〇一九便

二月二四日（火）成田着十六時三〇分

感想

バスケットボールの研修が主体でしたが三日目のリバーフォールズ高校訪問が衝撃的でした。公立の学校ですが施設は私立並みでしかも機能的で、授業が生き生きしていました。本校生徒は選択科目で日本語を採っている十五人の生徒と一緒に授業を受け、互いにそれぞれの文化の違いや習慣の違いについて質問しあったりして有意義な時間を過ごしました。学校のカフェテリアでランチタイムまで共に過ごして帰ってきましたがもつと時間が欲しかったです。

二二日夜の大学生との交換会は遅くまで話題が尽きませんでした。本校生徒が一方的に留学の動機やアメリカ生活で困った事など矢継ぎ早に質問し、アツという間に時間が過ぎてしまいました。チーム遠征では得られない貴重な体験をしました。バスケットボール研修で参考になったのはミネソタ大学女子の練習見学でした。ビッグテン所属のチームはどれもすごいです。翌日、ノースウエスタン大学との試合を観戦しましたが、ウイリアムズアリーナは超満員。通常男子の試合は観客が多いのですがビッグテンの試合といえども女子の試合はパラパラとしかいません。そのことだけでもミネソタ大学の女子の評価が高いことを伺えます。

三月二日（火）

なんとビックリ。セネガルに帰省しているジャトウからEメールがきました。内容は、「元気ですか？アメリカは楽しかったですか？私は家族に会えてとても嬉しいです」と簡単なもの。でもこのメールで「ジャトウはちゃんと長崎に戻ってくるつもりなんだ」と私は思いました。実は半分「ジャトウは帰省したまま戻って来ないのではないか」と思っていたのです。

三月八日（月）

ジャトウが夜八時に福岡空港に到着しました。クルマで迎えに行き、寮に降り着いたのは夜一〇時半。

三月九日（火）

いつも通り朝七時二五分にマイクロバスで寮生を迎えに行く。ジャトウは起きてこない。岩永姉が起こしに行く。ジャトウが寝ぼけ顔で起きてくる。バスに乗る。学校に着いた。みんな朝練を始める。ジャトウはウロウロ。靴を捜したりウエアを捜したりしている。みんなより十五分くらい遅れてジャトウがボールを持った。そこで「集合」と声をかけ、みんなを体育教官室（暖房で暖かい）に呼ぶ。以下ジャトウに言ったセリフ。

今日、俺はお前に練習させるつもりはない。俺はお前がどんな態度を取るか試しただけだ。このあと



お前は職員室に行つて先生方に挨拶し、朝のホームルームで友達にあいさつしたら寮に帰つて休め。昨夜俺は何も言わなかった。だからお前は「明日は普通どおりなんだ」と思わなければならない。それなのにお前は遅刻した。しかも、「すみません」といわずに「おはようございます」と言つてバスに乗り込んだ。そこにお前の人間性が現れている。お前は帰省前の約一ヶ月、帰省のことばかり考えていて練習にも試合にも集中できずに九州大会をボロボロにした。それを俺も選手達も「はじめての帰省なんだから仕方がないさ」とがまんしている。休暇は終わった。お前にとっての二年目が始まる。考えることはただただひとつ、「もつと鶴鳴の役に立つために…」それだけだ

このあとジャトウは職員室に行つて担任の先生に挨拶したが泣いてばかりで話しができなかったそうだ。そして、教室に行つてもみんなの前であいさつができずに泣いていたらしい。

三月二二日(月)

時前に実施しておいたジャトウの貧血検査の結果を聞く。血清鉄八。ヘモグロビン九・三。スポーツ選手の値ではありません。その他のことも含めて自己チェックをちゃんとやって自分を管理していかなければ将来の幸せはつかめないと説教しました。一応泣いていました。が、明日からちゃんとやるとは限りません。

【ジャトウその後】

三月九日、帰省にまつわることで私に説教された時と、三月二二日に自己管理のことで私に説教された時にジャトウは一応泣いていたが、それからしばらく経つてこんなことを言った。

「帰省はフライトや乗り継ぎでものすごい時間がかかるのと、行きも帰りも時差ボケの調整で体調がおかしくなるので、三週間の休暇を貰つても実質セネガルでくつろげるのはほんの一週間ぐらいしかない。だから帰省期間をもつと増やして欲しい」

帰省期間のことだけではなく、アリタリア航空を使えばイタリアのマルペンサ空港で乗り継ぎのために一〇時間以上待たなければならぬが、エアフランス航空で行けばすぐ乗り継げるので、アリタリア航空ではなくエアフランス航空で帰省させて欲しいとも言いたかつたのだと思う。エアフランス航空を使えば航空運賃がアリタリア航空の三倍かかる。冗談じゃない。大した貢献もしないくせに要求ばかりするジャトウの言い分を聞いてやる気はまったくなかった。

ジャトウの要求に対して私は、

「三月八日に日本に戻つたあと約二週間後に関東遠征と四国遠征がある。そのために体調を整えておかなければならないなんてお前は考えたこともないだろう？日本に戻つてからのことを考えて帰省期間中セネガルでランニングしたりして体調を整える努力なんかまつたくしてないだろう？」  
と言つて一蹴した。

【平成十六年三月十六日付け 山崎純男のホームページより】

学園内人事異動のお知らせ。二〇〇四年四月一日付けで私の所属が変わります。鶴鳴学園長崎女子短期大学幼児教育学科教授となります。

これまでの私の身分は高校所属の教員でしたが平成十六年度からは短大所属の教員となり、高校ではバスケットボール部の監督及び講師として保健体育科の授業のお手伝いをするようになります。

所属長宛ての公式文書は短大へ、バスケットボール部の監督としての所属長宛ての公式文書は高校へ、それ以外の文書はどちらでも可となります。これまで通り高校のバスケットボール部の指導者としては何も変わることもなくがんばって行きます。よろしくお願いいたします

というわけで、前年の長崎ゆめ総体の時私は六一歳となり、すでに定年を一年延長していたのだが、理事長は引き続き高校バスケットの監督を続けさせるために私を短大に移籍させた。

【遠征いろいろ(一)】

三月十九日～二十日 鹿児島遠征 対戦チーム 神村学園・鹿女子・延岡学園  
スクリメージ 一〇本 一〇勝〇敗

三月二十七日～二十九日 関東遠征 対戦チーム 土浦日大・倉敷翠松・福井商業・慶誠・昭和学院  
東亜学園・市立柏・山形商業・佐久長聖  
スクリメージ 一〇本 三勝七敗

コメント

金床は九州春季選手権大会直後から腰痛のためチーム練習には参加せずリハビリのみ。遠征には不参加。ジャトウは、三月八日に再来日。翌々日から練習に加わりましたがまったくダメ。あまりにも様子がおかしいので血液検査をしたところ、ヘモグロビン九・三でした。さっそく鉄剤投与を始めましたが、遠征でジャトウがプレイできないのなら遠征そのものの意味がないので悪化を承知で起用しました。

二 沖繩

平成十六年〇四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 岩永姉 岩永妹 高岡 杉野 ジャトウ

【案内文書】

金床は二月の九州大会以後ずっと腰痛で休養。

岩永姉は半月板手術からもう三ヶ月は経ちましたので練習試合でも出場させますが動きは七割程度しか復活していません。

ジャトウは二月二十六日から帰省し、三月八日に戻ってきましたが練習はまったくダメ。特にグラウンドでの五千メートルランニングはタイムトライアルどころかペース走にもついてこれず、タイムは常に三〇分台。おかしいなと思ひ血液検査を受けさせました。昨年五月の検査結果はヘモグロビン九・九で血清鉄は十七。今回の検査結果はヘモグロビン九・三で血清鉄八。これはもう病人です。スポーツどころか普通の生活でも無理をさせてはいけないレベルです。おまけに、三月二〇・二一両日の鹿児島招待試合で足首の外側の靭帯を少し傷め、いつも足を引きずっています。

そんなわけで、ちゃんとやれるのは岩永姉妹、高岡、杉野、森重だけ。それでも三月二十六日から開催されるジャパンエナジーひまわり杯に参加しました。ですから新入生は入れ替わり立ち替わり出場させました。ひまわり杯では三日間でスクリメージを一〇本やりましたが二勝八敗。ジャトウを出さなければ試合にならないし相手にも失礼ですから、この三日間はどの試合にもジャトウを出しましたが、今日から貧血回復のために当分の間練習から除外です。

おそらく、春季選手権はぶっつけ本番で出し、またそのあとしばらく貧血回復のための休養期間が必要でしょう。もちろん鉄剤は検査後から与えています。通常は一錠ずつですが二錠ずつ飲んでいきます。他の代替え選手が居るポジションは休まれてもかまいませんが、ジャトウが休むとチーム練習がまったくストップしてしまうのが痛いです。

それはジャトウに頼っているという意味ではなく、弱点の補強や改修で他の選手にはさほど時間を取らないのですが、ジャトウの補強や修理には時間がいくらあっても足りないくらいだからです。「去年、俺はお前を叱りつけてばかりだった。しかし二年目三年目は叱られても強くはならない。自覚だ。自覚がなければ何をやっても前には進まないぞ」と、何度も言い聞かせています。

【結果報告】

初日

濱口と永田のオリンピック出場激励会が日本代表チームのスケジュール上この日にしかできないというので私は長崎に残らなければなりませんでした(春季選手権は島原開催)。それで、三根氏にマイクロボス運

転とベンチコーチを頼みました。

山崎 三根連絡事項

金床はケガのため使ってはならない。

ジャトウのブレイクタイムは五分を越えてはならない。

下級生の出場時間は島原半島出身の選手を優先すること。

二日目・最終日

前日から振り返した風邪が今年最悪。三月二〇日に引いた風邪を、治ったかなと思っただけで振り返すといった具合ですと引きずっています。日曜日にもかかわらず遂に病院に行きました。インフルエンザならまだしも、普通の風邪で病院に行ったことなど記憶にありません。

さて、本題に戻ります。選手の起用には細かく神経を使いました。上級生では今年になってからケガも病気もなく練習を続けてきたのは高岡と杉野だけです。岩永妹が春休み遠征中に転倒した時のケガは実は骨折だったということが、この試合の案内文書を書いた直後に判明した。それ以外の上級生の起用についてはブレイクの内容だけではなく、ちょっとした表情や息づかいまで見逃せません。それと、三月下旬以降ずっと上級生に手ほどきさせてきた新入生にとっては初の公式戦ですから「なるほどそうか」という勉強をたくさんさせなければなりません。とにかく一秒も無駄にはできないのです。

まだ新学期が始まったばかりですが、六月上旬の県高校総体まではあつという間です。その間、岩永姉妹がどこまで復活するだろうか、ジャトウは貧血の具合を見ながらどこまで仕上げようか、一年生の主立った選手には県高校総体で戦力になってもらうためにどこまでがまんし、どこまで要求しようか、などなど、あらゆることの見極めをしなければなりません。風邪で頭痛がひどい上にいろいろ考えていたら頭が割れそうな三日間でした。

見極めをするために出場時間が長くなった選手や、もう実力が分かっているの見極めをしなければならぬ選手に出場時間を回してもらった選手など、事情がさまざまです。出場時間の多い少ないで重要視されているかそうでないかを判定しないでください。

#### 【戦評】

長崎商業は小粒選手ばかりだが動きがよい。鶴鳴は長崎商業の動きに翻弄されてスリーポイントやドライブインを止めることができない。前半終了時点では三九対三八と鶴鳴リードで終わったが、試合の主導権は完全に長崎商業のものだった。しかし、長崎商業は後半二回のドラウトの間に鶴鳴に連続ゴールされて力尽きた。激しく動くということはバスケットボール競技にとって非常に重要な要素だがそれだけで勝負を決めようとするのは無理なのか？本当にそうなら一生懸命努力している選手やコーチがかわいそうすぎる。平成八年の風軍団も小さい選手ばかりでよく動いたが全国制覇はできなかった。「小さい選手ばかりでは善戦はできてチャンピオンにはなれない」そんな思いを何度も味わった。しかし私の本音は「リクルートや資金や施設で勝負が決まるのではなく、訓練すればチャンピオンになれるんだ」という前例を作りたい」である。それが叶うまで頑張り続けたい。

文責 山崎 純男

#### 【遠征いろいろ (二)】

四月二四日～二五日 熊本遠征 対戦チーム 神村学園(レイナ＝中国)・慶誠(ラマ＝セネガル)

スクリメージ 十五本 二勝十二敗

四月二九日 福岡遠征

対戦チーム 九州女子・神村学園

スクリメージ 六本 四勝二敗

コメント

三月遠征以来、金床もジャトウもチーム練習からはまったく除外してリハビリのみ。試合も様子を見ながら起用しました。

【遠征いろいろ(三)】

五月二日～五日

倉敷遠征

対戦チーム

倉敷翠松・福井商業・小林・宇部慶進・徳島城北

スクリメージ

十五本 二勝十二敗

コメント

ジャトウの貧血は、五月一日の検査でヘモグロビン十二まで回復。でも、決して無理をさせず肝心な試合以外は用心しながら起用しました。「お前がムキになって勝負したところでラム(慶誠)とバナ(翠松)の素質にはかなわないよ。ムキになればなるほど自滅するだけだ。身体的素質で劣るならばアタマで勝負しなきゃ」と言ったらめずらしく素直に「ハイ」と言いました。試合内容も私の忠告を素直に受け入れてプレイしているという場面が随所に見られ、「昨年よりいくらか成長したのかな」と思った矢先、最終日の最終試合で捻挫してしまいました。また県高校総体前の三週間はチーム練習から除外してリハビリに専念させなければなりません。

平成十六年〇六月

県高校総体

優勝

スタメン

岩永姉

金床

高岡

杉野

ジャトウ

【案内文書】

紛失

【結果報告】

初日

ジャトウへ

「試合中にコートを歩くな！走れ！俺たちはまだお前を信用していないんだぞ。私は変わりました。私の私とは違います」と、自分の行動でそれを我々に見せなきゃならないだろうが」

二日目(二試合とも)

一ピリ 岩永姉・金床・高岡・杉野・ジャトウ

二ピリ 岩永姉・岩永妹・金床・高岡・杉野

三ピリ 泉谷・大宍・高崎・森・前川

四ピリ 泉谷・大宍・高崎・森・前川

高岡は考えすぎて空回りがずっと続いていましたが解除された模様です。大宍の弱点だった左手ドリブルが改善されました。これはとてつもなく大きな収穫です。以上、二日目の報告です。

三日目

純心戦開始四分でジャトウ二反則。前半はほとんど出ず。後半出場するもぶざま。インサイドでボールを得てもシュートをことごとく落としました。しっかり身につけたというものを何ひとつ持たないからです。それは、一年生にも言えます。ベスト四以上の試合で出場させた時、鶴鳴が主導権を握っている状態では彼女の良さだけが光るのですが、ペースが乱れ出した時には甘さと若さが暴露されます。特に前川にはいい勉強になったと思います。

最終日

長崎西戦 一ピリ三〇 十四 二ピリ十七 十二 三ピリ二〇 九 四ピリ二一 一三三

昨日の名誉挽回を期していたのか、金床と杉野の顔が引き締まっていました。特に杉野は開始早々爆発。他の上級生もジャトウも動きがよく、第一ピリオドで勝負が決まっていました。各県の総体が終わったチームから次々と報告が入ってきました。徳島城北×、福井商業×、九州女子(二位)、神村学園も慶誠も鶴鳴も勝ったものすつきりしないなど様々です。でも、出来が良かるうが悪かるうが、県予選で勝たなければ全国大会には出られません。城北の富田・福井商業の中池両コーチの無念さも背負って本大会に臨みます。

## 【戦評】

勝負は第一ピリオドでついでしまつたので試合評はせず個人評をする。今年の新入生はすごい。鶴鳴の泉谷・大宍、長崎西の兼頭・川上、純心の平川・小川、この選手たちは小さいながらも昨年のジュニアオールスターでチャンピオンになつたからそれぞれ個性が強い。加えて鶴鳴の前川がまたすごい。彼女はキャリアがないのでこれからバスケットを覚えていかなければならないが、今年のフレッシュマンは来年再来年とバスケットファンの目を楽しませてくれそうだ。残念だつたのは、純心の出岐が長崎西戦の途中で捻挫してしまい、舞台から降りたことだ。出岐は素晴らしい選手である。しかし、ケガをして試合で出られないようであればその力を発揮しようがない。「無事これ名馬」ということわざがあるが、出岐は名選手であるだけに、このことばを噛みしめて精進し、日本を代表する選手に育つて欲しいと思う。 文責 山崎 純男

平成十六年〇六月 九州高校総体 二回戦 スタメン 岩永姉 金床 高岡 杉野 ジャトウ

## 【案内文書】

県高校総体明けの六月一〇日はグラウンドトレーニングから始めました。これから毎週月木はグラウンドトレーニングを取り入れるつもりです。最大の理由は、ジャトウのバージョンアップです。ジャトウがハイレベルのゲームで四〇分間集中力と体力を保てるようになれば全国大会の上位は狙えないからです。二番目の理由は新入生のレベルアップのためです。新入生のうち三人は今年度の全国大会で戦力ローテーションに組み込めそうなので急ぐのです。

今度の九州大会にはその効果は出ません。でも、九州大会が終わつてから取りかかつたのではインターハイと九州国体に間に合いません。ですから、九州大会を戦い抜くための準備としてはグラウンドトレーニングの再開は少し乱暴かもしれませんが「全国上位を本気で狙うぞ！」という意識が九州大会の戦いぶりに反映されることを期待しています。

組合せはご覧のとおり中村学園のパートに入りました。「ベスト四にはなんとかして残りたい」が望みであれば第一シードのブロックに入ったのは不運でしょうが優勝を狙うのであれば中村と慶誠の両者を倒さなければならぬのでどこに組み込まれても同じです。また、この両者以外にも九州女子（セネガル人留学生のジャーネを擁する）や小林や鶴崎も強敵ですから、今回の九州大会はどこに組み込まれても組合せが良かったとか悪かったとかは言えないでしょう。一戦一戦でいねいに戦うのみです。

個人的には、ジャトウの貧血が完全に治り、ようやく本格的な訓練ができるようになりました。岩永姉が県高校総体で右膝の古傷を傷めましたがいしたことはありません。金床の腰痛は少し残ってはいるものの九州国体まで一気に突っ走ります。森重の踵のケガは完治しました。野村のリスフラン関節捻挫は完治までもう少し時間がかかります。

## 【結果報告】

中村学園戦の第一ピリオド、私は「こいつら強くなつてる」と思いました。だから私は、第一ピリオドが終わつたところで「勝ちに行つてみようかな」と思いました。試合の采配を振るう場合、指揮官というのは常に本音を隠し持っているものです。隠し持っているといっても選手には見抜かれていたり、選手自身も指揮官と同じ本音を持っていたりする場合が多いのですが、この九州大会に臨む私の本音は「選手には優勝を狙うのならば中村と慶誠の両方を破らなければならないのだからどこのパートに入つても同じことだ」と言いましたが「中村戦がヤマだな」と思っていました。

で、何が本音かというところ「試合のなりゆきをみて見極めをしよう」が本音でした。試合を進めながら「善戦できれば上出来」とか「勝つて当たり前」とか「これはなかなか勝てる相手ではない」などを見極めようとしたのです。今回、中村学園と対戦するまでは鶴鳴がはたしてどれくらい力をつけたものか私にはわかりませんでした。試合が始まつて数分経過したときに私は「ここまで来たんだこの子たちは」と思いました。それで「勝ちにいこうかな」と思つたのです。



ですから第二ピリオドはジャトウを休ませて残りの選手たちで凌がせようとしたのです。ジャトウを温存したのは「ジャトウがいくら成長したといつても彼女が四〇分フルに集中力を維持して戦えるわけがない」と、私が彼女を本当に信用していなかったからです。

「このままうまくいくわけではないのだから、ジャトウを休ませている間に時間をつなぎ、もし逆転されても射程距離の点差なら後半ジャトウを投入して取り返せる」そう選手たちには言い気聞かせましたが、追いつかれる引き離されるという現実の中に放り出された彼女たちはパニックを起こしてしまいました。自滅ブレイが再三出て、挽回するには苦しすぎる十三点差で前半を終わってしまいました。

結果的に二点差で負けましたが、後半残り五分には再び七点差まで詰め寄ったので、本当に強くなったのを認めてやりたいと思います。あとは、インターハイまでに本人たちが「私たちはやれるんだ」という思いを強く持って日々の練習に取り組むことが何より大切でしょう。私に踊らされたり、私の采配で危機を脱出する他力本願の生き方ではなく、自らの心の奥底から湧いてくる熱い思いがプレイで表現されるようになれば、インターハイではノーシードですが大物を食って上位進出が可能でしょうし、国体も上位進出が可能になると思います。これからの彼女たちに必要なのは自立の二文字だと思います。

#### 【戦評】

第一ピリオドは鶴鳴が主導権を握る。第二ピリオド、鶴鳴はジャトウを温存。リズムを取り戻した中村学園が着々と加点する間に鶴鳴はまったく得点できず。四分間のドラウトwを含めて第二ピリオドはわずかに六点のみ。六分間がまんしていた山崎はついに耐えきれずジャトウを投入。三二のゾーンディフェンスに切り替えるが息を吹き返した中村学園の勢いは止まらない。中村学園四三対三〇鶴鳴で前半を終了。

後半、マンツーマンに戻した鶴鳴は必死に食い下がるが一旦主導権を握った中村学園はなかなかそれを渡してはくれない。このままずると終わるかに見えたが残り五分に再び鶴鳴がギアチェンジして追いつき、また試合は面白くなる。しかし、「この一本!」という場面で鶴鳴が自損事故を起こして万事休す。結局二点差の中村学園圧勝に終わった。

文責 山崎 純男

#### 【国体チーム遠征(一)】

七月十八日～十九日 福岡遠征 対戦チーム 鹿児島少年女子・九州女子(ジャーネッセネガル)

スクリメージ 十四本 十二勝二敗

#### コメント

国体チームは、鶴鳴八人・純心一人(出岐)・長崎西二人(横山 納富)・長崎商業一(前田)の構成です。岩永姉はインターハイに向けて膝の調子が悪くならないよう自重させました。

前川はこの遠征の五日前に捻挫。素質抜群ですがキャリアのない前川にとってはこのような対外試合は何にも替えがたい貴重な体験なのに、それを一回パスしなければならぬとは…。私の悔しさは彼女には多分わからないかもしれません。

出岐はもう三年目のつきあいになるから打ち合わせの必要はありません。横山と納富はまだ勝手がわからないようです。これから今月下旬の遠征とお盆遠征を経てチームの一員らしくなるでしょう。

ジャトウは一年前のこの時期に比べれば雲泥の差。そうでなければ厳しいことばをたたきつけてきた甲斐がないから当たり前といえれば当たり前のことですが、この一年間短い文章では語り尽くせない出来事や、他人に公開することばでは表現できないような闘いが私とジャトウの間にはありました。このあと、月末遠征やお盆遠征と、息つく暇がありませんが、この夏の終わりには人間として成長したジャトウを作りあげたいと思います。

#### 【国体チーム遠征(二)】

七月二十六日～三〇日 山口遠征 対戦チーム 福岡選抜・鹿児島選抜・山口選抜・誠英高校・長崎選抜



## コメント

山口滞在の二日目、私はジャトウを喉輪で壁に押しつけて怒鳴りつけました。それはジャトウがハイボストでイリーガルスクリーンを掛けたからです。その行為は審判には反則を取られなかったけれども私の中では許されない行為でした。その直前に私はジャトウに「お前がスクリーンするときには膝を出すことや、攻撃するときには手や肘で相手の腕や身体を払ったりする行為は反則だからな、それはやめるよ」と言っただけでした。

だから私は「お前、俺が忠告した直後にまたダメなことしただろ？どんなことした？」とジャトウに問いました。ジャトウは「ディフェンスが甘かったです」と言いました。イリーガルスクリーンのことは触れませんでした。

その瞬間私は「この一年、きさまのファウルトラブルにどれだけ俺たちは悩まされてきたか分かっているのかあ！」「しかも、今のは俺が忠告した直後のプレイだったんだぞお！」と言いながら前述の行為に走ったのです。

ジャトウは落ち込んで次のスクリメージは出場しましたがまったくプレイする意志がありません。交替させて「お前、今自分がどんな態度をとっているのかわかっているのか？」と問いつめました。ジャトウは涙をボロボロ流しながら「私が鶴鳴に必要なのならセネガルに帰れと言ってください」と言った。私は「必要ないとは言っていないよ。何度も注意されたことをお前が聞き流してプレイするからアタマに来たんだ。お前は首を絞められたなんて生まれて初めてだろうしショックだっただろうが、俺はお前を導くことに関係はお前の数倍の辛さに耐えてるよ」と言った。

「セネガルに帰れ」と言われても帰れるわけがないのです。本院も家族も出稼ぎ感覚で来ているのですから。私は昨年「おまえがやっている行為は企業ならば契約違反だぞ」と言っただけです。ジャトウがセネガルに帰るといふのなら「帰っていいよ」と言いたいのが本音です。しかし、ここは引き留めてやらないと彼女の自尊心を大きく傷つけるのでそれは言いませんでした。

山口合宿最終日はこの事件のショックで二日目の夕食と最終日の朝食はまったく箸をつけなかったらしい（マネージャーの報告）です。それなのにプレイはそこそこやっていました。

平成十六年〇八月 インターハイ 三回戦 スタメン 金床 高岡 杉野 泉谷 ジャトウ

## 【案内文書】

昭和五三年四月一日、私は公立中学校の教員を辞めて鶴鳴女子高校に移籍しました。その年のインターハイが松江でした。今年四月一日、学園内人事とはいえ長崎女子高校から長崎女子短大に移籍しました。そして、移籍した年のインターハイが松江です。不思議な巡り合わせを感じます。

チームのこれまでの経過を辿ると、岩永姉は一月以降膝の手術後のリハビリで減速。金床は二月の九州春季大会から五月中旬まで腰痛のためにチーム練習から除外。ジャトウは三月中旬に初めての帰省から戻ってきたら重度の貧血になっていたので鉄剤投与で一ヶ月のブランク。しかも、ようやくチーム練習に参加できるようになったと思っただけ（初日（五月七日）に捻挫してまた二週間チーム練習から離れる。といった具合でチームをしっかり整えるということができませんでした。

それで、県高校総体が終わった直後の六月一〇日以降、週二回のグラウンドトレーニングを入れることにしました。これはジャトウや金床のスタミナアップと新入生の訓練が目的です（前述）。金床やジャトウが相手に厳しく守られた時や、疲れが溜まってきた時に失速しないでそこそこのプレイを続けられるならば鶴鳴は強いんです。

でも、彼女たちだけに責任を負わせるのは酷なので、泉谷・大倉・前川の一年生トリオを繋ぎ役として働かせたい。それが可能ならば金床とジャトウの負担も緩和され、これまで風邪も引かずケガもせずに生き残

ってきた高岡と杉野が暴れてくれるだろうと思います。とにかく、調整するという暇はありません。大会に突入するまで強化訓練の連続です。戦術や采配はその場になって考えます。

#### 【結果報告】

長崎を七月二六日に発ち、山口合宿・倉敷合宿を経てそのまま松江に入りました。いつもは、山口県光市での招待合宿が七月二一日から二三日まで行われるのですが、今年は会場がとれなくてずれ込み、二六日から二八日までとなってしまいました。二八日に一旦長崎まで戻ってすぐまた松江まで長距離ドライブをするのはイヤだったので、倉敷翠松の平松先生にわがままを言って二九日三〇日は倉敷で合宿をさせてもらい、そのままインターハイに乗り込んだのです。

事前合宿ではちょっとした事件がありました。前述したので説明は省きます。インターハイ直前にそんなことがあったの本番。こんなことは私も初めてです。結果的に、九九%勝ちゲームを相手に持ち去られたのは、しばしば前頭葉制御不能に陥るために引き起こすジャトウのファウルが引き金となり、ジャトウより少しましだとはいえ他の選手もそれぞれ持ち合わせている愚かな一面がちよっとだけ勝負所で顔を出したのが原因ではありますが、ちよっとだけで収まったのは半年前の「こいつら、少しでも舵取りを間違ったらどこへ走っていくかわからない」という状態に比べれば大きな成長と見てやらなければならぬと思います。

ジャトウは、三回戦の実践学園戦の第四ピリオドに五反則退場してしまいました。試合は延長戦になりましたが、延長戦はジャトウなしで戦わなければならず、今年のビッグイベントのひとつをジャトウは昨年同様ファウルトラブルでダメにしまいました。でも、「またあいつのために大事な試合をひとつダメにしてしまった」というイヤな思いは残っていません。今年のインターハイにおけるジャトウの働きぶりは、目も当てられなかった昨年に比べればまるで別人かと思われるようにがんばりました。私だけでなく、「勝てたのに!」という思いは選手たち自身が強く感じているはずですから、八日から再開する練習でそれがどういう形になって現れるか見守ろうと思います。

#### 【戦評】

実践学園戦。第二ピリオド早々鶴鳴はドラウトに陥った。特にジャトウの徒労が目立ったので、前半は一旦追いつかれるのを覚悟でジャトウをベンチに下げる。リードしていたのに追いつかれたことを不安に思っている選手たちに、徒労で無駄な体力を費やすよりリフレッシュして後半にもう一度力を発揮してもらった方が得策だと思つてジャトウをベンチに下げたのだと説明する。

第三ピリオド半ば頃から次第にジャトウ効果で点差が開き始める。第四ピリオド、ジャトウ四つ目のファウルを取られるが、昨日の試合で前半四ファウルしたにもかかわらず持ち堪えて四一得点の活躍をしたジャトウがアタマにあつたし、ジャトウの気力が充実していたのでそのまま押し切る作戦に出たのが失敗。その直後にジャトウは五反則退場。その時の点差は八点。それを三分で追いつかれ、勝負を持つて行かれたかに見えたがそこから残りの選手が頑張った。杉野・金床のスリーポイントや高岡のドライブなどで再逆転。残り十三秒で実践の攻撃が失敗し、鶴鳴のスローイン。スローリングして試合終了となることを捨て身のステールでボールを奪われて延長戦に持ち込まれた。ウーン。

文責 山崎 純男

### 三 新潟地震

平成十六年〇八月 九州国体 二位 スタメン 金床 出岐(純心) 杉野 高岡 ジャトウ

#### 【案内文書】

インターハイでは長崎少年女子の母体チームである鶴鳴がホントに惜しい負け方をしてベスト八を逃しました。でも、ジャトウが五反則退場したあとに一旦追いつかれたのを再度逆転したことは、ジャトウ抜きで実践学園と互角に渡り合ったということですから、ジャトウ以外の選手たちにとっては自信に繋がったと思います。

さて今年の補強選手は、三年連続になる純心の出岐と新たに横山・納富（長崎西）が加わってくれます。出岐は三年目のつきあいですから気心は分かっていますし、新加入の長崎西二人も七月の二回の遠征で充分な働きをしてくれたので、チームワークに問題はありません。最後の締めくくりとしてお盆の十三日から十五日に遠征をしますが、ここでしっかりチームを整えて本番に臨みたいと思います。

現況と今の気持ちを報告します。

まず現況です。インターハイでのジャトウはまた五反則で退場してしまいました。昨年とは別人のような働きをし、それが帰崎後の今も続いています。雰囲気だけでなく、インターハイ後の初練習の五千メートル走では自己ベストに次ぐタイムを出すというような具体的な出来事として現れています。彼女が来日して以来初めて「今度こそほんとに働いてくれるのではないか」という気持ちで毎日彼女を観察しています。

もう一つ、「ここは足で勝負だ」という時に一年生トリオが役に立つんです。それはインターハイで実証済みです。インターハイではまだ少し遠慮があったり甘い一面が出たりしましたが、彼女たちは使い減りしませんから出発直前までムチを入れて鍛え上げ、決して付録で連れて行くのではないと言ったことを自覚させようと思います。

次に今の気持ちです。「出岐が最後に大暴れしてくれるんじゃないか」という気がしてなりません。もちろん私の場面作り次第ですが、とにかく、すべてを出し尽くして戦ってきます。

#### 【国体チーム遠征（三）】

八月十三日～十五日 岡山遠征

対戦チーム 岡山少年女子・操山中男子

スクリメージ 十一本 五勝六敗

#### コメント

岡山少年女子には一九三cmのセネガル人留学生のバナがいます。九州国体の同じパートで戦う熊本少年女子のラマ（一八九cm）対策のために、関西遠征を終えたばかりの岡山少年女子に無理矢理お願いして練習試合をさせてもらいました。操山中男子は二〇日から行われる全国中学大会に中国地区代表で出場する男子中学生のチームです。

さまざまな組合せやケースを考えて戦いましたので、勝ちや負けの数、それに個人個人の試合出場時間はチームの強さや個々の選手の力量を必ずしも反映してはいません。特に十四日の二回目の岡山戦ではジャトウが反則でベンチに下がっている間に持ち堪える場面を想定して小さい選手ばかりでゾーンを敷き、逃げ切りの練習をしました。バナにことごとくオフェンスリバウンドを取られて逆転されました。やはりジャトウのファウルトラブルを如何に制御するかが最大のポイントです。

#### 【結果報告】

前にも書きましたが、国体と言えば毎年、県競技力向上対策課で仕事をしている職員の方々の苦勞がわかっていただけに重圧を感じます。

九州国体の組合せは、六月の九州総体の一位と二位がシードされて二つのグループに分かれ、他のチームはフリー抽選で振り分けられます。私たちは第二シードの熊本のプールに組み込まれました（七月五日）。それ以来、私は熊本のラマ対策に全力を投入し、九州国体まで引つ張ってきました。しかし代表者会議でラマが病欠欠場と知って拍子抜けしてしまいました。

でもこれでホツとして気が抜けるのが怖かったので、選手には少しの妥協も許さず厳しい注文を付けながら初日を迎えました。というのは、ジャトウが初めての帰省直前でまったく集中力を欠いていたとはいえない。月の九州春季大会で鶴鳴は大分鶴崎に一〇八対一〇六で負け、その大分鶴崎主体の大分選抜とは初日の熊本戦のあとに戦わなければならないという組合せになっていたからです。

ですから、初日はそれぞれの持ち味が発揮され、二試合とも圧勝で終わった時は本当に膝の力が抜けてしまっくらいいホツとしました。

二日目。初戦の佐賀選抜との試合は出岐をまったく使わず、ジャトウもほんの少し出しただけで温存し、

決勝の福岡戦に照準を合わせて優勝を狙いました。が、試合はまったくぶざまな結果に終わりました。どんな手を打ってもそれぞれの選手の弱点が入れ替わり立ち替わり登場し、それをまったく抑え込むことができないまま試合終了のブザーを聞くことになったのです。

これでは「本国体の出場権を得られた」と手放しで喜ぶことはできません。このことについてはもちろん私自身も深く反省しなければなりません。コート上で修行の足りなさを感じた選手一人ひとりが深く反省しなければなりません。これから本国体までは二ヶ月ありますが、二学期が始まりますから各選手の練習はそれぞれのチームで行う回数の方が多いでしょう。その二ヶ月間自分のチームでの練習においても本国体のことを常に思い、「あと二ヶ月で絶対に自分自身を変えてやる」という信念を持って練習に取り組まなければなりません。

本国体に出場するからには皇后杯得点に繋がる結果（ベスト八以上）を出さなければならぬし、観衆の心をつかむ試合をしなければなりません。そのことが夢の中にまで出てくるように選手たちが変わってくれることを期待したいです。

## 【ハワイ】

九州国体は沖縄で開催された。期日は八月二日（土）と二三日（日）の二日間である。沖縄開催の行事は常に台風情報を気にしなければならぬ。この大会前には台風十七号と十八号が発生し、運営する沖縄協会の人々も参加者もこの二つの台風情報に神経をとがらせていた。

通常の大会なら台風のために九州へ戻る飛行機が飛べなくなっただとしても帰る日が送れるだけでたいしたことではないが、この年は大会終了の翌日に福岡空港発七時五〇分の飛行機で鶴鳴はハワイに発つことになっていたのが気ではなかった。事実、台風が遅かったのでかろうじて沖縄を立つことができたが、もうちょっと台風が速かったらハワイ遠征はアウトだった。

そのことはまたあとで触れるとして沖縄の台風の話しよう。この年の夏は、六月の九州総体が沖縄市、今回の九州国体が具志頭村と、同じ年の夏に二回続けて沖縄県で大会が開催された。そして二回とも台風が翻弄された。九州国体はかろうじて台風から逃げ出せたが六月の九州総体の初日は台風に見舞われ、泊まっているホテルの看板や窓が壊れた。

二日目は開催が危ぶまれたが、台風が夜中を通り過ぎたので一回戦の開始時間を遅らせて開始し、無事大会を終了することができた。話しはここからだ。台風真っ只中の初日の夜、安里幸男先生が「山崎先生、沖縄の仲間から要請を受けて先生を連れ出しに来たんですが」と言っただけで宿舎にやってきた。連れて行かれたところは居酒屋だった。満席だ。

「台風だよ！みんな何してるの？」

と言っただけでみんな笑っていた。沖縄では台風が来たら夜の歓楽街はどの店も満席になるのだそう。台風が来ると仕事が休みになる。だから台風が来た日の夜は遅くまで飲んで仕事に差し支えないからなのだ。本土では台風が来るとどの家のお父さんも風で飛びそうなものを片付けたり、板戸に釘を打ったり窓に目張りをしたりして忙しい。沖縄ではそんなの日頃からちゃんとやっているから台風が来ると言っただけで特別やることはない。ただ、台風が過ぎ去るのを待つだけ飲んでいればいいのだ。

さて、ハワイ遠征のことについて話そう。

鶴鳴は三年に一度チームでアメリカ遠征をする。この年アメリカ本土ではなくハワイになったのは、それまで二回、ハワイのミニバスチームが日本に遠征に来た時いろいろお世話をしてやったので、そのお返しをしたから次回アメリカ遠征をするときはアメリカ本土ではなく是非ハワイに来て欲しいと、ハワイのミニバスチーム（HOOPS I M U A）から言われていたからだ。

私個人としては、ハワイに行っても練習試合ができるような相手はいないだろうし、いろんなコーチとの勉強会もできないと思っていたので気乗りしなかったが、ハワイ側は試合の相手は必ず用意するから是非来

てくれと頼む。それで「強化だけが目的なら韓国やアメリカ本土がいいが、強化だけではなく、異文化に触れるとか外国でのバスケット友達ができるかもしれない」という意味もあるので、ま、一度ぐらいはいいか」という思いでハワイからの誘いを受けた。

この遠征はジャトウも連れて行くつもりだった。しかし、日本人がアメリカに旅行をする場合はビザは要らないが日本在住の外国人はビザが要る。それでインターネットで大阪のアメリカ領事館のサイトを開いてビザ申請について調べたが、ビザは毎日申請できるわけではなく申請できる日が決まっていた。調べたのは七月上旬であったが、調べた時点で一番早い申請日に申請をしても出発日の八月二三日までにビザの発給は間に合わないことがわかった。

ビザの発給に時間がかかるのは事務的に面倒なだけではない。規則がややこしいのだ。例えば、ビザは発給できたとしても発給する時にジャトウは未成年なので保護者同伴でなければならぬと言われたりする。日本の身元引受人（部活動の監督である私）ではダメなのかと聞くとダメだと言われる。ビザ発給のために親をアフリカから呼べというのだ。そんなことできるわけじゃないか！と言うと、それなら発給できないというのである。いくら規則だと言われてもこの扱いはどうしてもビザを発給してやりたいという方向ではなくビザを発給しない方向に話しを持っていつて難癖を付けているとしか思えなかった。が、規則がそうなっていると聞ければ何も言えない。

こうして、ジャトウの帰省やビザ発給で様々な難しい問題にぶつかる度に私は、その根底には人種間の信用の問題や国家間の信用の問題が根深く横たわっているのだなあと思うようになった。たぶんそれは、偏見とか差別など、たった二文字で云々することはできない複雑な問題だと思う。というわけで、ジャトウにはお小遣いを与えて日本に残して行くことになった。

帰りは、現地時間二九日十一時三〇分ホルル空港発の飛行機で、関西空港着は三〇日十五時。しかし、関西空港十七時発福岡行きJAL二五六七便は台風のために飛ばないと告げられた。またしても台風だ。いろいろ手を打ったが全然ダメなのでいち早く関西空港を脱出。新大阪にホテルを取り、翌三一日の朝早い便で帰ることにした。三一日の朝刊には「関西空港に約千人缶詰」という見出しの記事が載っていた。関西空港から泉佐野に繋がっている橋が強風のために封鎖されたので、関西空港から出てホテルを取ることでもできず、かといって待ってれば次の便が飛ぶわけでもないので仕方なく空港のベンチやフロアで一夜をすごした人が千人もいたわけだ。あとで聞いたことだが、私たちが関西空港から乗った泉佐野行き南海特級ラピート号は、私たちが乗った便以降は運行停止になったそうだ。問一髪だった。

### 【ミャー】

九月一日（水）

ハワイから帰ってきたらミャーがとても弱っていた。自力で五歩歩けない。私が不在の間、新体操部監督の古賀先生の手厚い介護で生き延びているがちょっと危ない。動物を飼えば必ず直面しなければならない事ではあるが弱ったミャーを見てるとつらい。

九月五日（日）

福岡遠征から午後七時過ぎに帰ってきた。ミャーは三日（木曜日）に入院して本日退院した。今回の入院退院ともまた古賀先生に御世話になった。やせてヒョロヒョロしてるが、歩けるようになってる。

九月二〇日（月）

退院後少し元気になっていたミャーがまた弱ってきた。食べないし歩きまわらない。ほとんどソファの上で寝ているし、今朝はネコ砂のトイレまで行けず、ソファーにおしっこを漏らしていた。食事も、ソファーで寝ている口元へ持って行ってやったら一口食べるが、サラについて用意してやってもいつもの食事場所まで歩いて行ってまで食べようとはしない。今は介護ネコ状態だ。

九月二三日（祭）

この三日間ミヤーがまったく食事を取らないので再び入院させた。今回はさまざまな検査設備が整っている時津町のさわもと犬猫病院に連れて行った。検査の結果、白血球数が六三〇〇〇と異常に高い値を示した。平常値は五五〇〇から一九五〇〇だから通常の三倍強。まず考えられるのはなんらかのウイルスや細菌による感染だ。これから詳しい血液検査をして感染源を突き止め、抗生物質投与で治すということになると思うが、骨髄に異常があるためにこのような症状が起きているのであれば治る見込みはない。いずれにしても、快方に向かうか否かはここ三四日間の検査結果でわかるだろう。

九月二十七日(月)

ミヤーの病状は、よく効く抗生物質を四日間投与し続けているが変わらない。白血球は六三〇〇〇のままである。このあと腸内通過状態と腸内の炎症がないか(下痢も吐きもしないのでおそらく無駄とは思うが)検査をする。

九月二十八日(火)

午前中母を見舞ってそれからミヤーを見舞いに行った。休診日だったが日直の先生が詳しく病状を教えてくださいました。バリウム検査では異常なし。白血球は昨日から抗生物質の種類を変えたのが効いたかどうか五八〇〇〇に下がっていた。それでも平常値の約三倍だ。何よりよくないのは食べないこと。今は入院前よりよい表情をしているが、食べないので点滴をはずせばまた弱ってくるはずだ。ウーン、難しい。

九月三十日(木)

さわもと犬猫病院に電話してミヤーの病状を聞いた。まったく食べなかった食事を二八日(火)の夜から食べ始めたそう。白血球の値は今日は五一五〇〇だった。

一〇月四日(月)

ミヤーの見舞いに行った。白血球は二〇〇〇〇まで下がっていた。あと一息だ。食事もしっかり食べたりあまり進まなかったりと不安定だが、私が見舞った時はしっかり食べていた。

一〇月六日(水)

退院。昨日の血液検査でまた白血球が三〇〇〇〇に上がった。原因はわからない。一時退院し、食事に抗生物質を混ぜて自宅療養をすることにした。そうしないと入院費がかさむからだ。入院期間はちょうど二週間で、費用は九三八七円だった。扶養家族に入れて保険に加入しなければ保たない。

一〇月八日(金)

食事に抗生物質を混ぜて…って言っても、退院以来ミヤーはまったく食事を取らない。大好きだったモンブチビーフだけを皿に盛ってやっても食べない。だから抗生物質は水に溶かしてスポイドで直接のどに流し込む。心配なので昨夜は体育教官室に泊まり込み、ソファベッドに寝た。夜は布団の中にミヤーが潜り込んで来て私のおなかの上に乗ってごろごろ言っていたがとても軽く感じた。このままでは弱ってしまうので今日はいろんな缶詰を買いに行った。ビーフはためなので鳥のささみ、カツオ、マグロ、シラス、エビ等いろいろ買ってきて皿に盛ってやると、それまで食事の用意をしてやっても見向きもしなかったミヤーが鼻をヒクヒクさせて近づいてきた。そしてマグロとカツオをががつがつ食べ始めた。嬉しくなった私はさらに継ぎ足してやった。ミヤーは三皿ペロツと平らげてしまった。ホツとした。今日は眠れる。

### 【ジャトウ弁論大会】

十一月六日(日)

長崎市内の原爆資料館ホールで外国人留学生による日本語弁論大会が行われた。参加者は一〇人。本校からはジャトウが参加した。演題は「おなじでもちがう」。スピーチの時間は五分。「長崎に来た当初私は多くの人々からセネガルでは一日に何頭ぐらいライオンを見ることのできるの?と聞かれました」で始まり、「私が初めてライオンを見たのはパリの動物園です」と締めくくるユーモアたっぷりのスピーチだった。未来賞(準優勝に相当する)と特別賞(LION BUT PARIS)の二賞ももらった。賞状やトロフィー

ーだけでなく、賞金四万円もゲット。「ジャトウ・・・焼き肉食いに行こうよ。お前のおごりで...」

平成十六年〇九月 ウインターカップ予選優勝 スタメン 金床 高岡 杉野 泉谷 ジャトウ

#### 【案内文書】

ハワイから帰ってきたのが八月三日。時差ぼけの影響もなく九月一日から練習が始まりました。まずは動く身体を取り戻さなければならぬのでグラウンドでの五千メートルランニングから入りました。初回と二回目は二〇秒を六一秒のペースで走りました。

ということは、五千メートルを二五分二五秒で走るわけです。このタイムはジャトウにとっては厳しいタイムです。ハワイ遠征前までのジャトウのタイムは、五千メートルを十四回走って二五分二五秒以下でゴールしたのが五回だけ。ところがこうして、みんなでペースを合わせながら走ると余裕を持って就いてくるのです。ですから三回目は一周六〇秒に上げました。するとジャトウは途中ちよつと離されかけましたが最後はみんなと一緒にゴールしました。その次からは一周六〇秒でも楽々就いてくるのです。この、数回にわたるペース走をとらえて私はまたジャトウに生きるということを教えました。

「このタイムは三月頃のお前に比べれば格段の進歩だ。しかしそれはジャトウの体力が向上したのではなく、みんながお前に合わせてくれているから就いていこうと努力している結果だと思う。引き離されたらあとは流して走るとか、シュートミスしたあと一生涯命デイフェンスに戻らないとか、気が乗らなかつたらまじめにやらないというお前の性格がまだまだいろいろんな場面で現れる。折角みんなに就いて走れるようになったのにまた小言を言われて不愉快だろうが、よい結果を出している時だからこそ、以前の私は何だっただんたろうと考えてみる。俺がお前に常々厳しく行っていることは、俺が厳しいのではなく、日本人が細かすぎるのでもなく、お前がフランスに留学してもアメリカに留学してもやはり同じように指摘されるだろう。お前がここで訓練を受けていることは、自分の将来の幸せに繋がるだけでなく、セネガル国民の信用を世界に広めるという重要な意味もあるんだ」

ジャトウ以外では、前川がこのところ私の集中攻撃を食らっています。素質は抜群なのですが注意力が持続しません。ジャトウも前川も球技が他人より得意というだけで、それを勝負に持ち込める域まで磨き上げてはいないからです。それは、バスケットの練習だけでなくそれ以外の生活の中でも自分を追い込んだことが少ないからに他なりません。訓練によって人間がどう変わるのかをお見せするのがコーチの仕事。同情はしません。

#### 【結果報告】

体育祭の練習で九月の第二週はほとんど個人練習とグラウンドでの五千メートルペース走だけ。十三日からはまたチーム練習に入りましたが、二日目の十四日はグラウンドメニュー。でも五千メートルはペース走りではなくタイムトライアル。それに百メートルダッシュ一〇本を加えた通常のグラウンドメニューを再開。その百メートルダッシュの練習の中からジャトウが足を引きずり出しました。その前の五千メートルでも既に五千メートルを切る力については他の選手たちに引き離され始めると例によって適当に流し始め、結局二五分四九秒でゴールしたので腸が煮えくりかえっていた私は、百メートルダッシュでジャトウが足を引きずり出した時も「ちよつとしたケガのくせにおおげさなパフォーマンスをしゃがって」と思って無視していました。

翌日のチーム練習では「痛そうな格好で練習するなら外れろ」と言って参加させず、少しお灸をすえてやろうと思っていたが、何日経っても痛そうな仕草は変わりません。こつちも維持を張って診察もしてやりません。結局大会当日までチーム練習には合流せず、しかも足を引きずりながらの出場になってしまいました。

しかし、最終日の長崎商業戦と決勝の純心戦は足を引きずりながらもキチンとプレイし、役目は果たしてくれました。それで私も少し気持ちをやや緩め、試合後足の診察をしてやりました。結果は予想通り足底筋膜炎でした。それにもう一箇所踵腓靭帯の停止部に圧痛がありました。でも軽い捻挫でしょう。

入学当初からちよつとした痛みですぐプレイをやめ、練習を継続しないジャトウでしたが、今回の診察時も痛い箇所が私に触れそうになるとビクツとして私の手を掴み、それ以上触れさせまいとします。ジャトウはちよつとした痛みに敏感でパフォーマンスが低下する選手なんです、それは意気地なしとかいうのではなく、あの原田五月もまったく同じタイプの選手でした。これは神経細胞の仕組みがそうなので仕方がないことだと思っています。

ともあれ、八月の九州ブロック国体と今回のウィンターカップ予選、二つの全国大会予選を切り抜けました。国体の各地予選は北海道で波乱が起き、インターハイベスト八の札幌山の手高校が帯広選抜に負けて出場できなくなり、長崎はその帯広選抜と一回戦で当たります。予選というのは勝ち抜くまで本当に気が抜けません。

#### 【戦評】

鶴鳴は出岐に密着ディフェンスするボックススワン。純心は当たりの強いオールコートマンツーマン。第二ピリオドに鶴鳴はゾーンをボックスからダイヤモンドに変えたが原則は変わらない。純心も当たりの強いオールコートディフェンスで、フロントコートに持ち込まれるまで苦しめようという構想は変わらない。

鶴鳴と戦う相手は、がっぷり四つに組むと最終的にはジャトウにねじ込まれるから当然攻撃に時間をかけさせるオールコートディフェンスという作戦で臨む。しかし、それもボール運びの段階でジャトウにうまく中継に入られると、効果できめんといいわけにはいかない。この試合もそうだった。結局、鶴鳴の主砲であるジャトウが三九得点、純心の主砲である出岐が二一点と、両主砲の得点そのまま両チームのスコアの差となつて決着がついた。

しかし、足を痛めているにもかかわらず三九得点と大黒柱の仕事をしっかりとこなしたジャトウと、ボックススワンを布かれたものの、チーム最高の二一得点をたたき出した出岐の働きぶりは見事だった。このまま国体でその力を充分発揮してもらいたい。

文責 山崎 純男

平成十六年一〇月 県総合選手権 優勝 スタメン 金床 高岡 杉野 泉谷 ジャトウ

#### 【案内文書】

今年の九州総合選手権はお隣の佐賀で開催されます。ですから、もしその大会に出場できれば二日間とも宿泊せずに日帰りで参加できます。それで今年の長崎県予選は参加することにしました。もし県大会で出場権を得たあとに宿泊のお金がないから行けませんというわけにはいかないから、県大会に参加するならば、本大会の出場権を得られたら本大会には参加可能かどうかということをちゃんと考えて参加しなければならぬのです。

県総合選手権には毎年参加したいと思っています。が、本大会が鹿児島や宮崎や大分で行われると参加できないので日帰りで参加できる地域で本大会が行われるときだけこうして参加します。どうして総合選手権に参加したいのかというと、社会人(成年女子)のバスケットというのはどんなチームでも駆け引きがうまく、ことばで脅したり、死んだふりをしたり、あきらめたふりをしてまだ狙っていたりするのがともうまいので、まじめで一生懸命ではあるものの、こんな駆け引きには弱い鶴鳴の選手にはとても勉強になるからです。

特に、高岡・杉野・泉谷・大宍・前川はフルタイム出場で勉強させたいと思っています。金床はたぶんコーチ役でしょう。岩永姉は国体に向けて身体ならしという意味で数分の出場はあるかもしれませんが。ジャトウは出場時間が長さ過ぎて足の痛みが悪化するようでは国体に向けて虻蜂取らずになるので、様子を見ながら出場時間を決めたいと思います。

一〇月は、二日・三日・一〇日・一六日・一七日の土日はずっと県内の試合で、二日から二七日までは本国体です。ずっと試合が続きます。こうなると、試合のことばかり考えて基本的なことを忘れてしまいがちになるので、そうならないようにウィークデイは基本的なことをより一層強調して練習します。



## 【結果報告】

この大会の案内文書に私は次のように書きました。

「どうして総合選手権に参加したいのかというと、社会人（成年女子）のバスケットというのはどんなチームでも駆け引きがうまく、ことばで脅したり、死んだふりをしたり、あきらめたふりをしてまだ狙っていたりするのがともうまいので、まじめで一生涯懸命ではあるものの、こんな駆け引きには弱い鶴鳴の選手にはとても勉強になるからです」

試合は予想通り、相手の老獪さに翻弄され続けました。特に症状がひどかったのが金床・高岡・杉野の三人です。泉谷や大倉はもちろん幼さ丸出しでした。金床にはコーチ役でのんびり試合をさせようと思っていたのですが、あまりのふがいなさに使えずにしまいました。

よかったことは、国体とウインターカップをにらんで復活のきっかけにしようと思っただけで起用した岩永姉が全盛期を思わせるような動きでみんなの活力を引き出してくれたことです。それと第四ピリオドのジャトウのプレイです。自分の不注意で相手にステイルされてレイアップにもちこまれそうになったプレイを必死で追いかけて、ブロックショットではたき落としたあととゴールポストに激突して転倒し、そのあと這いずりながらコートに戻って転がっているボールをアウトオブバウンズになる寸前に取り返し、味方に繋いだプレイです。

必死の形相で追いかけているジャトウを見ていた私は「こいつ、カッとなってまたシュートファウルするんだらう」と思い、ファウルしたあとにジャトウに浴びせる皮肉言葉を用意していました。ところが結果は真逆。私は思わず「GOOD JOB!」と叫んでいました。

痛かったのは初戦での前川の捻挫です。素質はあってもキャリア不足の前川にこそ、大人の老獪さを味わってもらいたかったのに試合に出すことができませんでした。勉強するには絶対の場を自ら放棄してしまつた前川。決して不運ではありません。それこそが実力。自らの甘さが招いた結果です。ナイスもぶざまも、すべて自分の生き様がそこに投影されるのだということを分かって欲しいと思います。

## 【戦評】

長崎県成年女子の国体チームの主力選手のほとんどを占めるストレッチ。ジャトウの足首の故障が長引いている鶴鳴。ジャトウの故障の分だけストレッチ有利かと思えたが、ジャトウが踏ん張った。極めつけは鶴鳴のボールをステイルしてレイアップに持ち込もうとしたストレッチの平田を猛然と追いかけて、ブロックショットした拳げ句、コートに転がるボールをスライディングして奪い返し、味方に繋いだプレイだった。この瞬間試合の流れが鶴鳴に傾いた。ストレッチのベンチもこのプレイを拍手で讃えた。

成年の部の試合というのはダレてしまつて、見ていて面白くない試合が多いものだが女子決勝は面白かつた。それはひとえに、高校生に負けないひたむきさでボールを追いかけて、走つたストレッチの試合態度に起因する。ストレッチアップパレ！

文責 山崎 純男

平成十六年一〇月 埼玉国体 三位 スタメン 岩永姉 金床 出岐(純心) 高岡 ジャトウ

## 【案内文書】

一〇月一〇日(日)と十一日(祭)の二日間で一応国体チームの最後のまとめをしました。内容は 出岐(純心)とジャトウの二対二の最終確認。ジャトウオンザコートの時とオフザコート時の攻撃方法の基本的な考え方の再確認。オールコートゾーンプレスのウイングの動きの再確認。ハーフコートゾーンディフェンスのウイングの動きと守備範囲の再確認です。

十一日以降は十六日(土)と十七日(日)の両日が長崎地区新人戦なので、出発まで国体チームとしてまとまって練習する日が取れません。したがって、それぞれの選手の自己管理と自己鍛錬が重要な力ギとなります。初戦の帯広選抜の情報は分析して各選手に配布してあるので、何度も読み返してシミュレーションしておいてもらわなければなりません。選手のみなさんわかっていますか？

個々の選手の情報をお知らせします。出岐はもちろんスタメンで思う存分暴れてもらいますが、先日の県下総合選手権でテスト出場させてみた岩永姉の復調も大きいです。加えて、足の丈夫さだけで起用してきた大倉は悪かなミスが少なくなり、危ない場面でも使えるようになりました。これも大きいです。前川は先の県下総合選手権で捻挫してしまい、本番にはなんとか間に合っても本来の動きはできないと思いますが、それは前田（岩永妹の辞退で補充）長崎商業）が充分埋めてくれます。前田の足は絶品です。ゲームがバタバタしてきたり、岩永姉が疲れてくれば納富（長崎西）と横山（長崎西）が控えています。気になるのはジャトウの足の故障ですが、十日の県下総合選手権で見せてくれたあの気迫あふれるブロックショットを見た限りでは少々痛みがあっても本国体ではきちんと仕事をやってくれると思います。とにかく用意はしました。あとは本番で燃え尽きるのみです。

#### 【結果報告】

開会式当日（二四日）汐碇先生（アシスタントコーチ＝清峰）の引率で選手は熊谷市の開会式に参加。宿舎に残ったのは私一人だけ。畳に寝そべってマンガ本を読んでいたらグラグラッと部屋が揺れました。地震です。しばらくしてまた一回、かなり激しい揺れだったので大きな地震なのだろうとは思いましたが、宿舎が青年の家だったので部屋にテレビもラジオもなく、震源がどこなのか、震度はどれくらいなのかわかりません。

夕方六時過ぎに開会式から戻ってきた汐碇先生が「地震、ひどかったですねえ」と言いながら部屋に入ってきましたが、言いかけている途中にまたグラツとききました。汐碇先生は目が点になり部屋の中央で四つん這いになってしばしガマガエル状態。夕食の時に長崎の三根さんから「地震、大丈夫ですか？」とメールが入りましたが、私はすぐ「自信はある。まかせておけ」と返信しました。

夕方七時頃には新幹線で埼玉入りする予定だった大久保先生（アシスタントコーチ＝純心）は、地震のために新幹線が動かず大宮で足止めをくらい、在来線を乗り継いで児玉町にたどり着いたのが夜九時少し前。八ブニングの連続でした。

チーム内では、九州国体直後に岩永妹を戦列から外して（本国体が受験と重なるため）長崎商業の前田を投入し、前川の足首捻挫の回復が長引いて戦力として期待できなくなったので本国体直前に純心の平川と交代させ、こちらも八ブニング続きで本大会に突入しましたが、選手たちは個々の持ち味を發揮し、しっかり役目を果たしてくれました。

準決勝で福岡に敗れたあとの汐碇先生との会話です。

汐碇「先生、今日の試合を採点すると何点ですか？八〇点くらいですか？」

山崎「イヤ、それ以上だ」

汐碇「九〇点？…一〇〇点ですか？」

山崎「それに近い」

準々決勝の東京戦（優勝候補）では、スコアは拮抗しているものの試合の主導権と余裕は常に東京側にありました。そんな展開の中で「これを守ればまだいける」とか「この攻撃が成功すれば勝敗の行方はまだわからない」という場面をこごとく凌いで勝利を引き寄せました。ですから、試合が終わった時はみんなの足が棒のようになり、ジャトウの足はピクピクいれんしていました。そんな状態で翌日の宿敵福岡に最後の三分まで勝負はどっちに転ぶかわからないという試合ができたことに私は九八点ぐらいあげたいのです。本当は一〇〇点あげたいのですが、優勝じゃないので仕方なく二点引きました。

#### 【戦評】

準決勝の長崎対福岡。出だし、福岡は九州女子のセネガル人留学生ジャーネをスタメンに起用したがジャトウにうまく守られて機能しない。したがってローポストの藤吉のシュートが詰まってうまく行かない。一方長崎もまた個々の攻撃がバラバラでリズムがよいとは言えない。前半はこのまま守りあいの試合が続く、福岡三五点長崎三二点の三点差で折り返した。後半福岡はジャーネを下げた森に変えてから攻撃のリズムが

よくなり、藤吉が本来の力を発揮し始めた。一方長崎は相変わらずの単発攻撃で決め手が無い。そうしているうちに長崎の動きが鈍り始めた。前日大接戦で制した東京戦の疲れが出始めたのだろう。それでも長崎は金床・高岡・泉谷が苦しいところでもなんとかつなぎ、決定的な差をつけられないまま粘って就いていった。しかし、足が動かない長崎には点差をひっくり返すほどの力は残っていない。福岡のエース藤吉は前半四得点しかできなかったが後半だけで二三得点。前半は対藤吉のミスマッチをみんなの足でカバーしていた長崎も、後半はそれが間に合わなくなった。福岡は強い！しかし長崎もよく粘った。そう言っただけでやりたい試合だった。

備考 福岡は長崎戦で機能しなかったジャーネが決勝の愛知戦では爆発し、優勝をもち取りました。

文責 山崎 純男

#### 【後日談 帰路】

地震は新潟県中越地方を震源としたマグニチュード六・八の直下型地震とあとで分かった。国内の遠征は北海道と沖縄を除く地域はすべてマイクロバスで移動する。埼玉国体の帰路は、大会会場が埼玉といっても群馬県に近い児玉町だったので、本庄児玉インターから高速道路に乗り、上信越道 長野道 中央道 名神道を通って泉大津から夜間フェリーに乗って長崎に帰るコースを取った。

本庄児玉インターから乗って長野までの高速道路は新潟県に近いコースをずっと走る。私は運転する汐碇先生にも選手たちにも「長野を過ぎるまでトイレ休憩なしだ。急ぐぞ！」と言って大急ぎで児玉町をあとにした。

汐碇「なぜ急ぐんですか？」

山崎「長野までは新潟県のすぐ隣りをずっと走るんだ。余震がいつ来るかわからないので早く危険範囲から脱出したい！」

汐碇「そうですか。ボクひどい方向音痴なので位置関係がさっぱりわからないんですよ」

山崎「わからなくてもいいからとにかく急げ！」

汐碇先生が私のバスを運転する時はいつも私に何か心配をかける。ともあれ私は、クルマが長野道に入ってからようやくホッとした。あとは走れば走るほど新潟から遠ざかるからだ。ちなみに、私が自分のクルマでどこかへ出かける時は途中で眠くなって休憩することがあるが、マイクロバスではとこまで行っても何時間運転しても疲れたり眠くなったりはしない。たぶん、マイクロバスで遠征する時は多くの生徒の命を預かっているという緊張感と「これでへそくりが 円はできる」という充実感がそうさせるのだと思う。

#### 四 代表者会議

平成十六年十一月 九州合選手権 一回戦 スタメン 高岡 杉野 泉谷 大窄 ジャウトウ

#### 【案内文書】

ジャウトウは国体でフル出場させたのでまた足首の痛みがひどくなり、しばらくチーム練習から外さなければならぬでしょう。九月十七日以来ずっとグラウンドトレーニングは外していませんから、チーム練習から外してもう一ヶ月以上になります。腫れてはいないのですが、踵腓靭帯を押さえると痛いと言っています。高岡も国体はずっと出しっ放しでしたからまだ疲労が残っていると思います。この二人は少し休養を取らせながら、杉野・泉谷・大窄・野村を目一杯鍛えなければなりません。特にディフェンスを強化しなければなりません。国体では、復調した岩永姉の牛若丸のようなディフェンスをみんな見えますから「あの人を越えたい」という強い思いをもって練習に臨んで欲しいと思います。

前川はまだダメでしょう。与那嶺もできません。ですから、この大会は高岡・杉野・ジャウトウ・泉谷・大窄・野村までが主力ローテーション（ケガが治れば前川もここに含まれます）。高崎や池田が主力ローテーションに引っかければ試合は楽になるのですが、それにはまだ時間がかかります。しかも、主力ロー

テーション組にすらまだこともつばさが残っていますから、まだまだやらなければならないことがたくさんあります。

しかし、高岡は国体で東京戦と福岡戦ともに充実した気持ちで試合ができ、泉谷も福岡戦の大事なところで岩永姉のつなぎができたので、それが新チームの精神面により影響として広がれば鶴鳴は強くなると思います。岩永姉と金床は国体で完全に復調してくれましたが、この大会はウィンターカップをにらんでというより下級生のキャリアを積ませるためにやりたいので、できたらアドバイス側にまわってもらいたいと思います。

#### 【結果報告】

初戦の相手は同じ高校生の熊本国府。一ピリ十四対二〇、二ピリ二六対十五、三ピリ十二対三〇、四ピリ二一対二八。生き恥をさらすということばがあります。私はこの試合では選手たちの敵にまわり、多くの人が見ている前で彼女たちのぶざまさをさらけ出させてしまいました。意図的にです。

この試合は終始一貫当たりの強いディフェンスをするよう選手たちに要求し続けました。ウィンターカップにはディフェンスをもっともつと強化して臨もうというテーマを持って国体以後強化を図っているので、その方針を貫こうという意図があったのです。それはジャトウとて例外ではありません。彼女も他の選手同様相手をデナイし、プレッシャーをかけ、追いかけて回します。

前半はなんとか頑張っていました。しかし、第三ピリオドの中頃ちょっとしたミスから試合の流れが相手側に傾きました。それからがいきません。浮き足だった鶴鳴の選手たちに自滅プレイが相次ぎ、第四ピリオドは完全に試合の主導権を奪われてしまいました。

ウィンターカップまでの強化方針を貫くとは言っても、国府を相手に当たりの強いディフェンスで勝負を挑むというのは相手充分に組ませてから試合をしようというわけですから無茶と言えば無茶です。しかし私は、相手に試合の主導権をとられたからといって当たりの強いディフェンスで勝負するという方針を変えませんでした。引つ込みがつかなくなつたからではなく、ちょっとした事件が起これば顔が引きつる彼女らの弱さをなんとかしたかったからです。

タイムアウトも全部取り、プレイの指示もちゃんと出しましたが、心の奥底には「きさまら、困つたらいつも俺の知恵につがりつきやがって！たまには自分達でも知恵と勇気を絞り出して苦しい試合をひっくり返してみろ！」という思いがずっとありました。この試合は、ことばや図解でどんなに明確に指示しても、コートが選手の味方になってやらなければ勝つことができないという見本のような試合でした。反省はしていません。この試合が一生に一度しか使えない抗生物質になつてくれることを願っています。

平成十六年十二月 ウィンターカップ二回戦 スタメン 岩永姉 金床 高岡 杉野 ジャトウ

#### 【案内文書】

メンバー表の頭に「欠」という文字が付いている選手は留守番です。エントリは十五名まで認められますが、背番号四番から十七番までの十四名で参加します。残酷で無慈悲のようですが留守番の選手を敢えて列記したのには意味があります。留守番の選手たちは、いずれも長期かまたは短期であつても大事な時にケガまたは貧血などで練習に参加していない選手たちです。

今、世の中は不景気真つ只中で、普通に努力していたのでは職にありつけません。他人より何倍も努力した者だけがどうにか職を得られる時代なのです。そういう時代の中で生きていく鶴鳴の選手たちの中に、苦しい練習が続いていた時には休んでいたのに、大会前になつて治つたから試合に出たいという安易な考え方は持たせたくないのです。

では、背番号を貰った選手たちにケガ人はいないのかというとそうではありません。岩永姉は国体で活躍し過ぎた反動で膝の手術痕がまた痛みだし、このところチーム練習には参加していません。高岡も頑張り過ぎ症候群でジャンパーズ二と脛骨疲労骨折になり、泉新人戦以後チーム練習には参加していません。ジャ

トウなんか九月十六日に足首を痛めてからずっとチーム練習には参加せず、ウィンターカップ予選、地区新人戦、県総合選手権、本国体、九州総合選手権、県新人戦の六大会すべてぶつつけ本番です。

でも、彼女たちは今ギブスをしていてもそのギブスを外しても試合に出てもらわなければならない存在なのです。特に苦しいのは、何一つ苦しいことを乗り越えたことのないジャトウは大嫌いですが、強豪相手に戦うためには不可欠な存在だから留守番をさせるわけにはいかないとです。これが世の中の現実。これが世の中の非情さ。悔しいですがだまって受け入れるしかありません。

というわけで、ケガ人を抱えたままのウィンターカップです。しかし、今年の二月の九州春季大会以来ずっと誰かがケガをしている状態で戦ってきましたから慌てたりはしません。ジャトウをベンチに下げると超小粒選手ばかりになります。ですから国体以後、当たりの強いディフェンスをすることに的を絞り込んで練習してきました。その成果を東京体育館にぶちまけてきたいと思います。

#### 【結果報告】

選手たちは誰でも例外なく、改良しなければならぬ弱点を持っています。その弱点は選手によって異なります。ある選手は精神面のもろさが大きな弱点だったり、ある選手は技術や体力が劣ることが大きな弱点だったり、或いはもつと根本的なもの例えば人生観の甘さが本人の成長を妨げる大きな弱点になることもあります。そしてその弱点は、一項目だけ改良すれば全国レベルに到達できる選手もいれば、全ての項目に渡って改良しなければ全国レベルに届かない選手もいます。

弱点を改良する方法は訓練以外にありません。訓練というのは根気が要るものだから時間がかかるものだということはスポーツをする人も知らない人もみんな知っています。競技会でメダリストになったりファイナリストになったりするとなぜ周囲の人々から讃えられるのかというと、それらの人は自分の弱点を克服すべく訓練を続けた人だと誰もが知っていて、その過程に感動するからです。

さて二ヶ月前国体で三位になった時、アシスタントコーチの汐碇先生に「選手を採点すると何点ですか?」と問われ、「一〇〇点に近い」と私は答えました。それは「いつも誰かが故障していて五人揃って練習したことはほとんどないのによくここまでたどり着いた」という意味を含んでいました。今回初戦で負けて同じことを問われたらさすがに一〇〇点はあげられませんが「不甲斐ない!」とは言いません。国体時よりもっとひどい状態で臨まなければならなかったのに、一応試合が成立してホッとしています。ひよっとしたら相手チームに失礼な試合内容になるかもしれないチーム状態でしたから。

とはいえ「ケガや病気も実力のうち(山崎語録四)」という私の考え方は変わりません。この試合で引退する三年生も、正月合宿から新たにスタートする一・二年生も、周囲の人々から「よく頑張ったね」(この状態で…)など余計なことばがつかないで)と心から言ってもらえる人間になれるよう、この一年間の出来事を自分の魂に刻み込んで欲しいと思います。

#### 【戦評】

新潟はハーフコートの二・三マッチアップゾーン。鶴鳴はハーフコートマンツーマンディフェンスでスタートした。新潟はオフエンスディフェンスともに小気味よい動きで鶴鳴を翻弄し、通常通りの試合ができていたようである。一方鶴鳴はすべてが後手に回り、苦しい展開となった。鶴鳴がこのようになった原因はゾーンオフエンスのもたつきにある。パス回し、ドライブ、インサイドとアウトサイドの合わせなど、普段はできることがチグハグになり、それがずつと修正されないうま後半に突入した。しかし、第四ピリオドに入るとそれが少し解消され、新潟失速! 鶴鳴逆転! の様相になってきたが、鶴鳴は取り戻したりリズムを維持できず、攻撃に落ち着きを欠いて土壇場で新潟に息を吹き返させてしまった。訓練の行き届いた新潟の動きと鶴鳴の甘さが対照的に映った試合だった。

文責 山崎 純男

#### 【後日談 代表者会議】

私は代表者会議にはいつも顔を出さず、マネージャーを出席させ、何かあったら面倒見てくれと知り合いの監督に頼んで済ませる。代表者会議ではいつも決まって運営方法や会場のことや審判などに対してクレ-

ムを付ける監督がいるが、そんなやりとりを聞くのが嫌いなのと、いろんな人に挨拶されたりあいさつしたりするのがうっとうしいからだ。申込み時点と大会参加の選手をケガなどの事情により変更する場合はこの会議で変更届けを出してそれが受理されなければ変更は認められない。鶴鳴にはそんな選手はいないから会議の顔を出しても何もやることはない。

「と思っていたが今回は大変だった。実は初戦が始まるうとしていた時、オフィシャル席で審判と高体連関係者が集まって何やら話しをしているのだ。普通ではない。深刻そうだ。と、主審のM氏が鶴鳴のベンチに向かってきた。」

M氏「山崎先生がベンチ采配をされるんですか？」

山崎「そうですよ」

役員「先生、実は鶴鳴の申込み書には先生の名前は引率責任者の欄に記入されているだけで、コーチの欄にもアシスタントコーチの欄にも記入されていないんですよ。先生もご存知でしょうが、コーチの欄に記入された人しかベンチ采配はできません。最初に申込書を見た時アレツと思っただけですが、代表者会議で訂正されるのだろうと思って敢えて連絡しませんでした。でも代表者会議でも訂正がなかったのよ。」

山崎「エーッ」

役員「他にアシスタントコーチもいないし、先生一人だけですよねえ」

山崎「そうです」

M氏「先生、試合はできませんが先生はベンチから立ち上がったたりタイムアウトを請求したりすることはできません。タイムアウトを取る時はコート上のキャプテンに指示を出してキャプテンから請求させてください。」

試合前のスコアシートのコーチのサインの欄には岩永みゆきと書かれて試合開始となった。私は試合中の采配でベンチに座ったことはない。だから、試合が始まってベンチから立つことがなくじっと座ったままの私の異変に気付いた人たちは、「山崎先生おかし」「いつもと違う。何かあったのかなあ?」「体調悪いのか?」などとザワザワし始めたそうである。

試合が終わってから「先生何かあったんですか?」といろんなひとたちから聞かれた。が、申込み用紙に自分の名前を書く欄を間違えたなどと恥ずかしくて言えなかった。

【後日談 残務整理（山崎純男のブログより）】

十二月二八日（火）

ウィンターカップから二六日に帰ってきて、その日から連続で寮の宿直です。その間、山ほどあった仕事のカタをつけてちょっと一息です。一番しんどかったのがジャトウたちの帰省の段取りです。なにしろ、国内の旅行者だけでなく、スペイン大使館やイタリア総領事館や在セネガルイタリア大使館などが相手ですから一件問い合わせするのにえらく時間がかかるんです。外国人留学生を抱えると余分なエネルギーを使います。

一月十四日（金）

十一月からずっと、ジャトウを始め他校のセネガル人留学生の一時帰省（2月中旬～3月中旬）の手配や調整をし続けてきました。ジャトウは今回はセネガルには帰らずフランスとイタリアに滞在して日本に戻りたいという要望を出していました。理由は母親がこの期間フランスの親戚とイタリアの親戚を訪問中でセネガルには不在だからだそうです。

他校の数名の選手からもイタリア在住の兄の所に立ち寄りたいたか、スペインの知り合いの所に寄りたい等、様々な要望が出たのでその一つ一つを叶えてやろうとして動いていました。そのために問い合わせをした大使館は、イタリア大使館・フランス大使館・スペイン大使館・南アフリカ大使館・中国大使館、それに

セネガルのイタリア大使館の計五つ。

航空会社は、エアフランス・イタリア航空・キャセイパシフィック航空・南アフリカ航空の計五社。それぞれに見解や解釈が違い、一つの質問をしてその回答がはっきりするのに一週間以上かかるのは当たり前で、二週間経つてもどう処理してよいのかはつきりしない事項もありました。

大使館員の電話対応に腹が立って「おまえが目の前にいたら絶対殴るぞ!」と思ったことが何度もありましたが、勉強になったこともたくさんありました。国によって大使館の対応が冷淡だったり穏和だったりするのは、それぞれの国とセネガルとの信頼関係が微妙に違うからなのです。

最終的に、セネガル人留学生はイタリアに滞在することは許されず、飛行機を乗り換えるためだけに空港を利用するランジットビザしか発行されないということがわかりました。それがわかってからいろいろ考えていたでしょう、ジャトウは昨日「ママがいない故郷に帰っても楽しくないので帰りません。将来の大学進学のこともあるのでお金を貯めたいです。その飛行機代は私にください」と申し出ました。

決して打算的ではなく、現実を受け止め、将来のことを真剣に考えた上での申し出だということがジャトウの目にはっきりと描いてありました。すでに航空券代を振り込み、発券手続きが完了していましたが急遽キャンセルしました。もちろんキャンセルした航空券代金はそっくりジャトウにあげます。が、この二ヶ月文字通り東奔西走して手配作業を続けてきたことが水泡に帰したむなしさと、「国の力や民族の力が弱ければこんなに辛い思いをするのか」という悲しい気持ち私を押し包み、この二日間眠れません。

二月四日(金)

ジャトウが風邪を引きました。来日して初めての本格的な風邪です。一日に頭痛がするといって休みました。その夜三八度七分の熱。翌二日夜四〇度まで上がったので三日の朝病院に連れて行きました。インフルエンザではなく普通の風邪でした。我々なら顔色が青白いとか熱っぽいというので病状を判断できるのですが、ジャトウは顔色が読めないのです。それがちょっと困りました。

二月五日(土)

今日は午後から練習。ジャトウは参加しましたがほとんど個人練習。

山崎「熱は?」

ジャ「下がりました」

山崎「お前、こんなに熱出したこと過去にあるか?」

ジャ「セネガルで一回あります」

山崎「熱は何度?風邪か?」

ジャ「何度かわかりません。でも熱出ました。風邪?だったのか何なのかわかりません」

彼女は、セネガルでは熱を測ったこともないし病院に行ったこともないんですよ。

【後日談 山崎純男を取り囲む会(山崎純男のブログより)】

三月十二日(日)

ずっと前、古海五月が「三月十二日は暇ですか?」と私に尋ねました。「空いているよ」と言うと「福岡まで行くついでにちょっと長崎に寄りますから食事でもしましょうよ」と五月。で、昨日の夕方鶴鳴にやって来ました。練習の途中で鶴鳴の体育館に姿を現した五月は練習が終わって帰り支度をしている時に携帯で誰かと話していましたが、「ちょっと、マック(濱口典子)も今長崎に居るんだって。マックも誘いましょうよ」って。

まさんなわけで食事に出かけましたが、場所はグランドホテル。「なぜグランドホテルなの」と私が五月に聞くと「マックがグランドホテルのバイキングの割引券持つてるんですって」と五月は言います。なにか腑に落ちない感じもあつたけど、「フーン」と言っただけで、そこには昭和五二年(私が鶴鳴に赴任した年)以降の卒業生がズラッと並んで立っていて、看板には「クレインズの集いー山崎先生を囲む

会」と書いてある。

なんと二ヶ月以上も前から五月とマックが発起人となって極秘で進められてきた計画だそうで、とにかく度肝を抜かれました。昔暴力を振るった教え子たちに取り囲まれて、しかも心の準備がまったくできていなかったから退路を確認する暇もない。突然そんな状況に立たされるといっつのは恐ろしいものですよ。あいさつでは、「ありがとう」という言葉を用いましたが、「もし襲いかかられたらどこから脱出しようか」と、そんなことばかり考えていました。